

右四味酒にて煎じ滓をさり温て服すべし。煎法常の如し。

一六

(一四) 同洗藥

一、小麥。一、甘草。各等分。

右水にて煎じ度々洗ふ時は忽ち治すること妙なり。

(一五) 女悦丸之法

一、金毛狗脊三分。一、蛇床子二分。一、紫梢花二分。一、兔絲子二分。一、丁子三分。一、附子三分。一、石灰三分。一、鹿茸三分。一、麝香三分。一、胡椒三分。

右七味細末にして蜜にて○ほどに丸じ

(一六) 神仙女悦丸別法

一、人參。一、龍骨。一、海螵蛸。一、附子。一、細辛。一、山椒。一、牛膝。一、明礬。一、丁子。一、麝香。一、肉桂。一、小榴皮。

右各等分細末にして糊にてねり○ほどに丸じ  
び啼くこと限なし。

(一七) 得春丹別法

一、石榴皮五分。一、青木香四分。一、吳茱萸四分。一、蛇床子五分。

右細末にして唾にてとき

ふくれて美快なり。

一、阿仙藥。一味右細末にして用るもよし。玉門をしめる妙藥也。

(一八) 煉木之法 (男色に用ふ。後出通和散を見よ)

一、鷄卵十枚。但黄味を去る。一、葛粉十枚。

右にふのりを加へすこし濃くとき紙へ延べ幾遍も幾遍も干ては付るなり。用やう。右の紙を嚙み味へば滑おちて口中に滿る也。

(一九)

一七九



一、燈花藥。

右一味すりつぶし唾にて付べし。

蠟丸 「真情指南」にあり。

女喜丹

五雲香

唐線香 「真情指南」にあり。

喜契袋 「真情指南」にあり。

是等の奇法數品ありと雖も紙數冊ごとに多くのびん事を厭ひ發客次篇に嗣出せんと云へり。よつて筆をこゝに止む……………。

猶「枕文庫」第三輯卷之上に左の奇藥がある。

男子生得より

露蜂房を焼てすりこはし細末となし二錢。新汲水に

て服すれば

南宮從が「岫巖神書」に載せられたり。

露蜂房といふものを按ずるに澤山の木の上にかけてる蜂の巢のいかにも大きなるが雨露にちらま

れたるもの、事也。このゆえに露蜂房と云。

新汲水とは井戸よりあらたに汲いだしたる水の清きないふ。これは浮きたる説にはあらず。

病有極めて老人の如し。左大臣奏聞ありて、典藥頭宗繼仰をかふむり。御藥を調進す。もつとも宗繼は和丹の兩典隨一の人なり。右あらはす露蜂房一劑を奉る。たとふるものなし。誠に希代の良藥なり。既に「本朝編年鑑」

に載て明白なること知るべきのみ。

同書第四輯卷之下に、

藥。日本橋通一丁目扇屋。

○天壽補元丹

右は唐土の名醫孫真人の奇法にして、人間の元氣を補ひ、  
それ男子老若に限らず

俗にいふ

こと神のごとし。  
はこれ腎虛のは



二八三  
薄くなして例の  
じめなり。此薬は常に をとりひしぎ、能氣をおさめて  
おこさしめず方のごとく用ゐる時はいかなる虚弱人といへども一夜に

引用之書物 (筆者曰此の書目参考の爲に掲ぐ)

- 鏗名人花叢圖說。
- 通甲書。
- 本草綱目。
- 五車祓錦。
- 房內府良方秘傳。
- 繁華麗錦。
- 新選開禮百ヶ條。
- 水鏡。
- 黃素妙論。
- 春説紀聞。
- 三才圖會。
- 丸闋苑。
- 唐玄宗後宮游戲秘傳。
- 枕系圖 元祿年中印本
- 青樓夜話。
- 全論。
- 月渡令。
- 艶道通鑑。
- 南宮從崎嶇神書。
- 如意君傳。
- 相法家秘傳。
- 肉蒲團。
- 其儘 元祿年中印本
- 獨寢。

磨倉草帑 元祿年中印本

(十九) 通和散 (練木と同じ) の異方

一、海蘿<sup>よのひ</sup>。一、鶏卵<sup>五枚</sup>。

製しやうは寒中のふりを能くさらし、玉子の黄身をさり、白身ばかり和して日に乾し、唐かね薬研におろし、極細末となし度々にふるいぬきて塗板につもりたるを最上とす。右少づゝ口に含み唾にてとき用ゆ。

又法ありツノマタをよく煮爛かし漉して滓を去り鶏卵の白身を等分に合せて美濃紙に引、影干に乾かし、かくする事、五六度を程として貯へ細元結紙の如く切り入用づゝ引きさきて口に含み用ゆ。

又外に薬種を入れて製する法ありといへども只香なくねばりあるをよしとす。此一法は上方のかけま子供屋にて自製するとぞ。江戸湯島天神下伊勢七といふ薬店にて製する通和散は極めてよしといへり。(此薬店通和散江戸一家ニ限ル)



○春の若草 中 東武嬌亭 著編

(一)

(イ) 蜂房はちのすを刻み、酒にひたしてあぶり使ふ事醫書にしるせり。戯れにあらず。蜂を黒焼にして車前艸せんじをすりて汁をしぼり和して

(ロ)

八月の中旬ごろ蜂をとりて生絹の袋に入れ蔭干にして二百日ありて半分にして土器に入れ白焚しろたきにし温酒にて吞べし。半分は唾にてとき  
四十日過ぐれば其の印し現はれ日ごろに  
さかんなり。是れ秘中の奇方なり。人々つゝしんで製し用ひ給へかし。

○歌女才學繪抄 上、下二冊 半紙本 英泉作

閩中諸藥傳

(一) 閩海膏

一、やうざん。一、ぶし。一、りうこつ。一、いかの甲。一、さいしん香五分。  
右粉にして水にてときこねませ  
絶妙なり。

(二) 鶯聲丹

一、せきりうひ。一、もつこつ。一、ごしつ。一、じやじやうし香五分。  
右四色粉にし、つばきにてよくねり、  
行ふべし。

(三)

一、じやじやうし。一、くこつのはし。一、たつき。  
右等分つばきにてよく練り、

(四) 秘曲方

一、ごみし。一、おんじ。一、じやじやうし。  
右刻み等分粉にして蛤を焼き其の汁をとりて練りむくろじほどに丸し



べし。

(五) 喜命丸

一、にんじん。一、ぶし。一、りうこつ。一、しかの甲。一、さいしん。一、めうば  
ん。一、じゃこう。一、ごしつ。一、てうじ。一、さんせう。一、肉桂。一、せきり  
うひ。

右十二味を各々等分に合せ粉にして蜜に糊をまぜて練り合せむくろじの大きさに丸し  
けて薬力廻るに従ひ  
うちへ入るべし、  
にてよい加減に薬と

ものなり。誠

あせる程なる故其時

喜悦いふ斗りなく思はず聲を

おもうこと眞實にか

にかゝる名法の奇薬なれば何ほどに慎み

決して忘るゝ事ある可らず。

○秘傳眞情指南

全本二卷 白水主人(英泉)戯編

(一) 長命丸

筆者曰、秘薬中、最有名なる長命丸の薬方  
を明記せざるは四ツ目屋に對する遺憾か?  
さぬ薬。

(二) 帆柱丸

なる薬。

(三) 紅毛臘丸

ぶ薬。

(四) 喜契紙

こぶ薬。

(五) 女悦丸

薬也。



(六) 唐線香

爲に用ふ。

(七) 通和散

かけまの用ゐる薬。

(八) 嬉開玉の露

あぶら薬也。

とも用ふ。

(九) 紅毛けい香

線香の類女の

(十) 懷妊丹

くわいたいする妙薬(京橋銀座一丁目にある)

(十一) 床の海 蠻名 フウスルア

女よ

(十二) 寐亂髪

(兩國吉川丁高嶋にあり)

(十三)

腎薬精つよくなる妙薬(上横丁にあり)

(十四) 菊の露

精弱き人の用ゆる薬。

(十五) 朔日丸

くわいたいせぬ薬(仲條流の醫者にあり)

○吾妻男述「閩中膝磨毛三編」の中舌八が島田附近で驛路の馬に乗たかわりに馬士

から 法を傳授される話があります。馬士の曰く「まづ蛇の衣

を粉にして是を少し貯へそこで菊花を(是はきよくの花なり薬種屋にもありとの註入)

よくせんじて粕を去其汁六七合を調へ、さまして右の蛇の脱衣と焼めうばんを少し入



此湯にて

事よ、舌ハ「ハテ妙な事があるもんだの……」云々

○閻王三十六佳撰

(一) 寢亂髮 (眞情指南にあり) のみにて薬法なし

(二) 喜契紙 (右同)

○寶鏡教繪抄 (末期赤本)

同中 藥早こしらへ

(一) 三ツ角銀杏を噛み破りつぶして其の露を  
受合なり。

(二) せんそ一味よく細末にして

薬法

る法

にてふき落して

ば其の

(三)

竹を破りたる中に紙のごとくなるものあり。それを噛みしめ、其の

破る如し。

(四)

直す法

たま〜少し

となりて用たぬものなり。是れ絶湯とて子種を

ば子孫をたやし先祖へ第一の不幸なり。いかにも養生あつて、

らす。さればかりその事に似たりと雖も子孫長久の法なれば、たはれたる事と思ふ

べからず。まづ露蜂ぼう、と云へるものを藥種屋にてもとむべし。是れ深山にある蜂

の巢也。是を黒焼にして呑み又

かくの如くにする時は



ちまぢ

事奇妙なり。

(五)

黄菊の汁を

る傳

と奇々妙々なり。

(六)

る法

一、蛇床子。一、ごみし。一、じやこうしゃ。

右三味一ト廻りの間、朝素湯にて吞む可し。

こと神の如し。

(七) られん香

女の心を亂す香。

○花天のうきはし 下 (中本末期)

(一) 石榴皮。菊花。等分。

右二味細に刻水五合入れ薬分目に煎じ

の如く

狭り温り有て

べがたし。

(二) 呉茱萸しゆゆ四分。青木香せいもくかう四分。石榴皮しじゅうひ五分。蛇床子じやこ五分。

右四味細末にして唾にて解

ふべし。

(三) 薯蕷やまのいしを摺焼明礬少し二味を押交つけて

肌いはだの如くなるもの出来

こと妙なり。

(四)

たるをを治す薬。

(イ) 一、甘草かんそう三分。一、生姜せいかう三分。一、芍薬しやくやく三分。一、肉桂にくけい二分。

右四味酒にて煎じ温て服すべし煎法は常の如し。

(ロ) 午膝ごせつ五分

右一味酒にて煎じ用ゆ前の如し。



(八) 小麦甘草。

二味等分に合せ水にて煎じ玉莖を度々洗ふべし即効あり。

(五)

其外疵付たるを洗薬

荊芥。蒼木。金銀花。

各等分に合せ濃く煎じ温めて度々

癒ることすみやかなり。

痛事あり伏龍肝と云てかまどの土をとり細末にして鶏卵の白ミを取

り練合せ塗てよし時珍が本草綱目に見へたり。

(六) 嗅せて女の

(枕文庫。文しな無。に重出せり)

(イ) 一、丁字二。一、甘草二。一、紫梢花八。一、白檀三。一、附子三。一、五

八相二。一、麝香六。一、龍腦八。一、海狗肝八。

右九味極細末にして練蜜にて丸し土器に入土中に七日埋置き取出し香氣のぬけぬ様

に貯へ置き女に對し燒べし、薰女の鼻の中に入ば

なり。

(ロ) 羅煉香(唐練香にはあらず)

紅毛の製にて薰を嗅せ、をんなの

眞の羅煉香は灰になれども落ち

ず。

(七) 吞ませて

薬

一、狗骨灰三。一、肉桂三。陽起石二。一、熟地黄二。一、桑螵蛸二。一、

破胡幣二。

右六味細末にして鶏卵にて練り〇是程に丸し酒にて吞ましむれば心うつくと上氣し

發る神薬と謂べし。

(八) 喜契紙の別法

一、麝香三。一、龍腦二。一、阿邊二。

各細末、小蛤壹合程員を去りて、能古酒三合の中に入れ能く摺濾てかすを去り三味の



薬に合せ炭火にて加減とろくに練り美の紙一枚に幾度も引き陽火にて乾し一寸四方に切貯へ置き

極る妙薬なり。

(九) 奇法煉丸輪の玉薬

- 一、母丁香ほてい七分。一、龍骨りゅうこつ四分。一、燒明礬。一、細辛さいしん一分。一、麝香じやく二分。一、海螵蛸かいこう四分
- 一、消腦せうなう三分。一、山椒さんしやう五分。

右八味極細末にして蜜にて丸し〇一粒宛

解るに従て

をしるべからず定に奇効ある妙薬なり。

(十)

合薬

- 一、菓子昆布おのり。海藻あわ。各五分。

右二味細末にして能く篩にかけ貯置。

〇文しなん 末期中本形。

- (一) 玉鎖丹
- (二) 如意丹
- (三) 壯腎丹 (黄素妙論にあり)
- (四) 西馬丹

〇新 婦美のはやし 大陰山人著 中本形

女悦妙薬傳

(一) 歡謳膏

- 一、じやうざん。一、ぶし。一、りうこつ。一、しかの甲。一、細辛。一、山椒さんしやう。

各五分。

右粉にして水にてとき、こねませ置き、

ば妙也。



(二) 喜陰方

一、しやじやうし。一、肉桂。一、狗骨灰。  
右等分粉にして唾にてねり合せ

(三) 厚精丹

一、丁子。一、ぶし。一、龍骨。一、肉桂。一、かうり。一、明礬。一、さんしゆゆ

(細をらん)

右七色等分粉にし水にて練りむくろじの大きさにして飯より先に酒にて三粒づゝ呑む可し。  
事奇妙也。たとへ

(四)

一、しやじやうし。一、ごみし。一、としし。

右三味粉にして丸じ飲むべし。若き人には無用なり是

(五)

法

事妙也。

ひましを臍に一杯入れ上を紙にて張りおきなるほどとれぬ様に、のりにてはりてよし。

(六) 鳴鶯丹

一、せき榴皮。二、もつこう。一、しやじやうし。一、ごしつ。

右四品等分粉にして、つばきにてよく煉りて

妙なり。

(七) 秘曲方

一、ごみし。一、おんじ。一、しやじやうし。

右刻み粉にして蛤を焼き其の汁をとりてむくろじほどに  
ふべし。

(八) 仙受奇妙丸

一、にんじん。一、ぶし。一、龍骨。一、いかのこう。一、明礬。一、細辛。一、じ



や香。一、ごしつ。一、丁子。一、さんせう。一、肉桂。一、石榴皮。

右十二味を等分に合せ粉にして蜜に糊をまぜてむくろじの大きに丸じ

れ置くべし。

○文のしな無 全 末期中本形。

閨中祕薬奇方

(一) 壯陽丹

一、丁子。一、ふし。一、りやうきやう。一、肉桂。一、蛤。一、さんしゆ油。 各二枚

一、明礬。一、いわう(硫黄) 各七分。

右八味を蜜にてねり、むくろじ程の大きに丸じ、すき腹のとき、三粒づゝあたゝめ酒にて吞べし。腎をおぎなひ氣力をまし 老人といへども若きものゝ如く

しかし若き男の妻なきものは、うくわつに是を服すべからず、

困るものなり。

(二) 如意丹 (黄素妙論にあり)

(三) 剛勢散

一、せんそ三錢。一、こしやう五分。一、じや香三錢。

右三味細末にして

ひ落して

こと妙也。

(四) 美鳴丸

一、丁子三錢。一、さうしやう四錢。一、龍骨。一、明礬。一、かいへうしやう。此四味

は少しつゝ

右六味細末にして生蜜にて煉り丸じ置き

(五) 奇快丸

一、石榴皮。一、じやしやうし五分。一、せいもつかう。一、ごしゆ油四分。



右細末にして、つばにて溶き

如何なるとし

いはんかたなし。

(六)

妙薬

一、せんそ、一味。(枕文庫。實撰教繪抄に重出せり)

(七) 嗅せて

(枕文庫天のうきはしに重出せり)

○筆の海大全 全 末期中本形。

(一) せんそ (枕文庫。文のしな無。實撰教繪抄に重出)

(二) 三角の銀杏 (實撰教繪抄に重出せり)

(三) 中位の白蛤三つ殻を離し肉ばかりを土器にて黒焼にし明礬を少し入

れ粉にして

事妙也。

(四) 黄菊 (實撰教繪抄。文のまことに重出せり)

(五) つむぬき大根を厚く輪切りにして酒にてよくたき、蒜味噌をかけて食し其の夜はやすみて翌る

妙也。

(六) 心せくこと勿れ、心いらちては

よし。

(七) 竹の薄皮 (實撰教繪抄。文のまことに重出せり)

(八)

は鹽を焼きてつききれにつくみ

くむる時は

○江戸名所二十八景 好色庵







一、黄菊の花。一、桃の葉蔭乾。

右をよくくせんじつめその湯にやきめうばんをくはへ是にて

尋常に異なり。

(四) 又法

一、桐の木せんじ汁をすこしたくわへ。一、ふしのこ。一、やまめうばん。一、て  
うじ少し。一、黄ぎくの花かけほし。合四味。

右をよくく細末し右桐の木せんじ汁にてときどろくといふとき日にほしてかため  
すこしかたくなりしときこれをたくわへおき

(五) 又法

大きなる蛤のつゆをしぼりてそのなかへふしの粉を少しいれよくくせんじつめおき

發すべし。

て此水をもつて

(六) チプルイター

一、じやせうし。一、ごみし。一、としし。一、コタン。一、レイヨウカク。  
右五味粉にして空腹に度々吞むべし。若き人は用ゆる勿れ。

(七) 角勢丸

一、丁子。一、ぶし。一、りうこつ。一、肉桂。一、かうり。一、明礬。一、さんし  
ゆ。

右三味細末にして水にてねり酒にて三粒程づゝのむ。

〇 集

(一) 婦人 秘法

五味子。遠志。蛇床子。各等分。

細末にして唾に和して



方也。

○逸題

(一)

蟾酥。龍腦。薄荷。各少量。

右三味を細末となし鶏卵のあま皮を干して刻みたるを加へこれを煙草の中に交へて其煙を

(二) 太真喜悅丸

蟾酥。阿片。丁香。各等分。

右三味を細末となし蜜にて煉交へ適當の大きに丸め置き之を唾にてとき

○ 卷下

(一) 無雙長命丸

此方は唐土隋の煬帝といへるみかど色を好み給ひて製し給へるくすりなり其時此くすりの名を遍春丹といふ日本にて長命丸といふ是本方也。

前述の修真演義の遍宮香と處方同じければ略。

(二) 女悅丸

此方は唐土秦始皇帝製し給ひて阿房宮にて翫給ひし妙劑なり。

金毛狗背<sub>三</sub>。蛇床子。紫桐花。兔絲子<sub>各一兩</sub>。丁子。附子。石炭。鹿茸。麝香。<sub>各三分</sub>。

胡椒<sub>三</sub>。

右十味いかにもよく細末にして練蜜にて○これほどに丸じ

へるに物なし。

(三) 得春丹

此法は大きな

給ひ

名法なり是も始皇帝の製し得春丹と號給ふとなり。

(四) 萬金散

此法同じく始皇帝の製にして得春丹に功驗十倍せり因而千金十倍も



惜おぼからぬといふ心を以て萬金散と號給ひし也。演義の童女丹と同じ。

(五) 壯陽丹 此法楚の襄王といふ帝の御年四十歳の時製し給ひ常に服藥し

年四十以上の人

ひてよし。

熟地黄五兩。巴戟去心。破故布炒。仙靈脾酒にひた。陽起石。桑螵蛸炒。

右六味いかにも細末にして煉蜜にて〇是ほどに粒しつねに十粒づゝすきはらに温酒にてのむへし七日にして

(六) 神仙丹 此法漢の武帝の御製なり此藥をつねに煉藥となして温酒にて毎日服

するときは腎をまし

鬢髮髭に至るまで黒くし年老ざるゆへ

に神仙丹といふ。

木通三分。木香一分。半夏。金嬰子。胡盧巴。遠志二分。猪苓。酸束仁。柏子仁。山藥。乾姜。熟地黄各五分。茴香炒。川山甲各三分。甘艸五分。

右細末にしてつねに一兩五分づゝ空腹に温酒にて吞べし腎を補ひなし實に神仙の奇の奇劑なり。

(七) 又法 此法同じく武帝製し給ふ所の靈劑なり是服する間

服藥

おはりて後

より此くすりを蒙厚恩といふと異名

して其時庶民に至るまでも用ひしと連城壁といふ書に見へたり。

川芎。木香。山梔子。薄荷。細辛。天麻。白芷。防風。砂仁。各等分。

右九味いかにもよく細末にして煉蜜にて丸し十兩を二十粒となし毎日空腹に温酒にて吞べし但し一日二度、一粒づゝ十日に吞べしその間かたく慎て

てのち心にま

ことなし藥の

せんじ汁を少し吞ばそのまゝ

疵付たるを治す藥



甘艸。生姜しょうが三分。芍薬。肉桂にくけい三分。

右四味酒にてせんじ滓をさり温て服すべし但し煎やうはつねのごとし。

(八) 又方

午膝ごせつ五分。

右一味を酒三合をもつて壹合半に煎じ滓をさりて服すべし頓に癒ゆ。

(九) 又あらひぐすりの方

小麦。甘艸。

右二色を等分に合して水にて煎じ

治す事妙なり。

○妙々文庫

(一)

羚羊角。桃仁とうじん火にてい。婁羊薹

右細末にして食前毎に少しづゝのむ。

(二) 又法

覆盆子。白胡麻。枸杞。

右細末にして毎日少しづゝ白湯にてのむ。

○地色早指南 第二編 英皇作

(一) 女悦丸即製

黄菊の花をもみしぼりてその露を

女悦丸にきくの露といふものあり。このゆゑになづけしもの也。銀杏の汁をつけるもよし。くはしくは奥にありたれども黄菊のしぼり汁につゞく早ごしらへの薬はたへてなし。もつとも秋の黄菊を最上とす。

(二)

る法

青竹を破るときは中に紙のごときものありこれを取りよくかみてそのしるを

され



ども奥にしるせる不老處女丹にしかず。くはしくは卷末を見て知るべし。

(三) 製即

る藥

助けふねといへる水牛にて作れるものありて老人の

する器なり。これ四ツ目やにあるといへども蟾酥一味よく細末にして

あたゝかみのあるうちに

ることなし。けいせい遊女たりとも、

早拵らへの專一なり。

長命丸

(四) 即席製法の喜悅藥

(い) 里芋なまにてすり、火にあたいめ、なり。

(ろ) 菓子昆布をよくくこそげ湯につけおき、鹽けをとり、目藥を右の露にてとき

用ゆべし。

(は) 三ツ角ぎんなんを生にて嚙み碎き、

常に十倍

(に) ゆずの皮をさり質をすり、その露を

無類の喜藥なり。

(五)

石榴皮。菊花。

右二味細かにきざみ大茶碗にて水一杯入れ七分めに煎じ、

もし美しき年増なら白齒にな

りて、引眉し、かみも島田にゆひかへて此藥にて

も

ろこしにては女は眉を剃らず、齒を染めず、年増に成ても娘の姿にて居ることゆへ此



薬を用ゐて  
年増などは必ず用ゆるものなり。

よつて不老處女丹と號すと也。唐にて契情けいせいの

(六) 圓靈丹

阿芙蓉ニ。朱砂五。

長命丸にまさりて

限りなし。

(七) 丁字圓

金毛狗骨三。蛇床子。紫梢花。兔絲子。各二。胡椒三。  
右十味蜜にてねり●是ほどに丸し、  
べし。

實に秘藥なり。

一、黃素妙論

(2) (1)

- 三、修眞演義
- 四、色道禁秘抄
- 五、春壽析甲
- 六、好色旅枕
- 七、女し令の川
- 八、小犬つれく
- 九、
- 十、文のまさこ
- 十一、逸題(文の……)
- 十二、艶道日夜女實記
- 十三、毬歌國字解

(4) (4) (10) (10) (14) (1) (1) (5) (1) (1) (4)



- 二十五、ふみのはやし
- 二十六、文のしな無
- 二十七、筆の海大全
- 二十八、江戸名所二十八景
- 二十九、文のはやし
- 三十、隊タテマツ隊タテマツ手事卷
- 三十一、
- 三十二、逸 題
- 三十三、好色智恵海
- 三十四、妙々文庫
- 三十五、地色早指南

(7) (2) (9) (2) (1) (7) (2) (1) (8) (7) (8)

- 十四、艶道文のゆきかひ
- 十五、萬寶智恵海
- 十六、枕 文 庫
- 十七、春の若草
- 十八、女才學繪抄
- 十九、懷寶眞情指南
- 二十、
- 二十一、閨玉三十六佳撰
- 二十二、實誤教繪抄
- 二十三、花紋天のうきはし
- 二十四、文 志 かん

(4) (13) (7) (2) (1) (15) (5) (2) (28) (3) (1)



書目  
藥方

一九七方

所載の秘藥方など、探せばまだいくらでもあるだらうが、大抵は同じ様なもので見付け次第、片つ端から集めて居たら、切が無くなるだらうし、これ文でも一と通りは集まつて居ると思ふから、處方を並べる事は打ち切つて、秘藥に關する文献逸話を諸書から引いて見やう。

「類聚名物考」に

「……俗に云ふ

藥となす也世俗の長命丸也劉韻が七略に醫に房中家と云

ふあり此藥をも製す。癸辛雜識南丹山中産相憐草媚藥也或有所關密以草少許擲之草必著其身不脫……」云々とある。

「慶長見聞集」中にも、

「藥師ひとり西大寺長命丸有りうらんと呼ばはる」云々と長命丸の名が出て居る。

「松屋筆記」には次の様な處方がある。

「白芨一味其まゝ細末にし蜜にて煉り朝夕用ふれば婦人無病になり

に尤も宜し。」云々。

其頃の「野傾旅葛籠」卷四

第四唐人も座慣て角の取れた丸山

の條下にやはり長命丸が出て居る。

「近年上方にて流行る長命丸に増りたる

を尋ねしに」云々。

「風流吳竹男」

本書は江戸のさる金満家の一人息子甚吉と呼べる色好みの男が浮沈する様を描いたもので、矢張り「好色一代男」を模倣した類似本の一つで斯る作物が當時の江戸にまで行はれたのは注意す可きである。作者不詳。寶永五年版。

二之卷 神田悪性店下



の中に左の一節がある。

「……此ほどは甚吉も、すこしは頭痛つかへもきざせど、そこはお局のさいかく、桐山三了が地黄、通町の右氣丸、左氣丸、藥王丸をば、ちやづけにしてたべければ、元もきれず……」云々。

藥の話になると、やはり柳里恭の「ひとりね」を引用せねばならん。然しこれは幾度も謄書に引用されてるから、此處へは簡単に書いて置く。

#### 秋の藥毒の大事

「岡島撥之が語りしは、二十年許り以前に長崎へ線香渡りぬ。其線香竹しん香の如く、竹に煉りつけしものなり。この線香

焼くと」云々。

「ひとりね」は享保十一年版だから、それより二十年前と云へば、寶永三年、五代綱吉時代になる文献によれば長命丸は既に足利末期に長崎へ渡來して居る。故に此の里恭の文章によつて長崎への秘藥渡來が寶永年間だなんて早まつた斷定は出來ぬ。それとも此の線

香が始めて來たと解釋すれば、されぬ事もない。

#### 「やなぎ梅研究」第一卷第八號 恩田經介氏の「打老兒丸に就て」

「……和蘭の藥と云ふ説もありましたが、昔から支那では用ゐて居つたもので本草書にも立派にのつて居ります、左に處方をお示しいたします。

#### 華佗方

功用 壯筋骨補陰陽

#### 藥品

石菖蒲、山藥、牛膝、山茶萸肉、遠志、巴戟、續斷、五味子、茯苓、楮實子、枸杞子、熟地黄、肉蓯蓉、杜仲、各等分。

#### 製法

共爲細末、酒糊爲丸、如梧桐子大

#### 用法

每服二十丸、空腹時溫酒逆下、服五日便覺身輕、十日精神爽快、二十日語言響亮、一年白髮鴉黑、行步如飛、功效之大、難以盡述。

「同誌」第三年第二號に綿谷摩耶火氏も「毛語錄」中で打老兒丸の事を言及して秘藥であるとして居られる。



「……寛永七年版『難波みやげ』にも〔打老兒丸には、だらうじぐわんと振假名あり。  
（前略）春ころさる人の教へけるは、打老兒丸といへるくすり、これぞ老となりて兒  
にかへる妙薬（中略）腎水まして氣力すこやかにして長命をたもち（中略）  
とあつて、之を服用したら隱居の身で

もずいぶん自慢いふ二十四五の男にもまさり」六十一の年齢で子供が出来たとあるから  
不老長生、一種の若返り薬であつたらし。

十返舎一九の『倡賣往來』に女郎屋で用ゐられる禁厭の秘薬方がある。

「酒、酢、醬油、鐵漿、油、水、燈心、此七品を等分に合せて是を煮立て、  
晝て一所に煮るなり、これ性惡の色をまじなふ法なり」

『洞房百話』望月翁編（大正三年の稿本。秋農屋望月翁、本名は梅本高節）

三 十

我邦にては牛蒡を以て

せしむる効あるものとし、歐米にては石刀柏を

以て

せしむる効あるものとし、又支那人は

しむる爲に菘、蒜

を食ふと云へり。されば笑林廣記に「妻問曰菘蒜有<sub>ニ</sub>何好處<sub>一</sub>汝喜食<sub>ニ</sub>他夫曰食<sub>レ</sub>之此物

一般的」又「絲瓜 不如菘菜」とあり。

三十二

支那にて迷婦薬また媚薬といふものは我邦の惚薬と同じものならんが、古來邦人は惚薬  
として蠟螟の黒焼を専ら用ふるなり、和漢三才圖繪四十五に「俗傳曰捕  
隔山燒之以爲媚薬」とあり、鼠の となるものゝ如くなれども是等は愚婦痴漢

の専ら用ふるものにて全然効驗あるものに非ず。

外骨氏の「猥褻と科學」に「たけり丸」の事が出て居る、

「天保八年版『海川諸魚常中市鑑』に曰く

多計重といふ、大なるは一丈もあり、小兒の夜小便を治す。また腎薬にして女  
虚勞によし、 男子腎虚に大によし



これに  
こと古書に見ゆ」

加へあり、臙肭臍

したけり丸といへる腎薬の行はれし

三六

大正十一年八月號「醫學及醫政」に滿洲の長谷川兼太郎氏は支那廣東地方の奥地の洞窟に棲息する蝙蝠が井守の黒燒と同様に惚れ薬りとして用ゐられとる書いて居られる。

「其翼は鼠色を呈し、體赤きは百年を経しもの體色純白にして、其形鵠大のものは千年を経しもの、又頭部に鶏冠あるものは最も古きものなり。然而其體中の陽精悉く腦に集中し居るがため、頭重く、常に逆さに下りをるはそれが故なり。夏期は多く紅蕉花の枝に棲み、雌雄の仲真に睦まじく、決して箇々に居る事なし、雌雄いづれかを捕ふる時は他は之を慕ひて傍らを離れず、容易に捕獲し得らる。其肉は増血劑として多大の効あり其毛は婦人病によく、又これを黒燒として意中の人に服さしむれば其戀忽ちに達す。之を媚薬といふ」

猶長谷川氏からは左の如き興味ある教示を得て居る。

儒門事親曰、筋痛者

挺脰不<sub>レ</sub>堪也

又解云此以<sub>二</sub>邪術<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>之邪術者

之故

治宜<sub>二</sub>解毒緩急<sub>一</sub>甘草黑豆湯主<sub>レ</sub>之東瀛子<sub>二</sub>曰、本朝ノ人ノ性ハ實ニ潔白ナリ漢土ノ醫書ニ春藥ニテ病起ルモノ在テ其治術並ニ經驗ヲ載セタリ、本邦ニテハ何程ノ富家ニテモ如此愚頑ノ行ヲシテ病ヲ求ムルモノハナシ、ト、此レハ作者醫書ノミヲ讀デ廣ク病人ヲ手掛ケザルニ因テナリ、今時舶來ノ蠟丸ヲ求テ姪ヲ食ル輩アルヨリ和製ノ春藥モ亦多ク此レヲ用ヒテ病ヲ起スモノアリ、余ハ都鄙ニテ數人ヲ療セシニ張子和ノ論ゼシ症ノ外 腫テ膿ヲ含ミ或ハ 破レテ膿血ヲ出ス、女子モ亦然リ、故ニ娼妓ノ輩春藥ヲ辭スル由、或ハ男女トモ シテ 手モ不<sub>レ</sub>放等ノ事アリ、其方何レモ蟾酥ヲ主ニシテ調合スル故其所爲ト思ハレタリ、此症ヲ治スルニハ砂糖水ヲ製シ患所ヲ洗ハシムレバ痛痒膿汁挈痛、挺脰浮腫忽ニ消散スルコト神<sub>レ</sub>如。餘藥ハ即効少シ濟衆ノタメニ此レヲ記シ宜<sub>二</sub>警省<sub>一</sub>

(天保丙申、緒方惟勝著「杏林内省録」)

はちのす(蜂房)方言本草刻酒に浸してあぶり使ふ五體身分集閉塞を起す方呂蜂灰車前草

三七



春て絞たる汁に和して塗ば發するなり禁物五辛生菓酒に醉ふべからず。又云  
成分八月中旬大呂峰を取て生絹袋に入蔭乾し二百日あつて半分にして土器に入白焚にし濁  
酒を用て飲め半分をば

家の遺法也、

四十日ありて效あり此方機を強くなす也是房中  
事扶桑記に見たり蓋是等の方なるべし昔は茲にも

房中家の醫ありし故衛生秘要抄などいふ書もある也、漢藝文志房中家あり、史記倉公傳接  
陰陽の書を陽慶にうけし處あり、周文傳以醫見景帝出内臥内於後宮秘戲常在側こ  
れ房中家なるべし唐土にも後世此術ほろびたり。(文政五年、奈須恒徳著「本朝醫談」)

右、緒方惟勝の説とよく似た文章が「色道禁秘抄」の第四十一回女悦藥大毒一味用益  
廣大知事。の中に出て居る。

問曰女悦の藥方甚多し何れか宜きや答曰外台秘要には礪砂を用ひ綱目には阿片を用ひ枕  
文庫には芋の自然汁を用ふ其他和漢の書籍春藥の方多き中當時賣買する春藥は悉く蟻蛆  
の不<sub>レ</sub>入はなし夫が爲めに痼疾ある者は舊毒の再發し

妓娼は

るを忌也強人にても

めくれ難義する事あり是を治するには砂糖水にて可<sub>レ</sub>洗他

藥効なし予壯年の時試たるに食鹽に勝る物なし其用法探宮に事寄せ密に

す怒り苦むべし其痛止めば

其時御せば

痼疾再發の患ひなし

藥となりて毒となる恐なし。

此の「色道禁秘抄」は確に珍書だが、作者は不明である。藤井博士によれば、京都、

中島標隱の匿名作、嘉永元年版行でなきかとある。もし此の鑑定が本當なら、出所は緒方  
氏にある様だ。

同書第四十三回蘭人愛思挺事并僧紅蓮の説。問曰蘭人愛思挺を焼て

なら

しむときけり實説なる乎曰香は穢を除き淫心を清淨にすと香家者流十徳の説なり愛思挺  
の方を聞くに鴛鴦杯入りて道理は尤なれども効ありとは不<sub>レ</sub>思依て考るに智囊といふ書  
に桑翽なる者迷藥を用ひて本心を失はせ衆婦を御したると同事にて蘭人毒烟にて心性を  
失はせ十分御するならん上條の緬鈴同様にて蠻夷の邪術可<sub>レ</sub>惡不可<sub>レ</sub>信なり近來中山一



流日蓮宗祈禱秘言を關るに明應三年丁酉七月四日於甲州大野順と云僧中山當流を傳受せし由を記せり其書中に愛敬の符「我思ふ君が心もはなるゝに思ひつきたり思ひあはせよ」此歌を三へん書て上を消し吞ましむべし。十三鬼の大事第六日符字を女の右の手の内に書けば長く思はる又此符を始めて逢て久しく思はれんと欲する女の手にも書なり云々姪僧の邪法も亦可、惡古人色中餓鬼と稱するも宜哉又佛家に 菩提水といふは小名錄拾遺に僧聰紅蓮といふ者女を犯して自死の時詠ぜし詩に腰間所積菩提水瀉向紅蓮といふに因て也。

媚香の逸話については是非とも、黒澤翁滿の「藐姑射秘言」から引く所がある。随分露骨な文章だが全文を載せて置く。

「藐姑射秘言」後篇

(原文の假名を讀み易き様漢字に當てたり)

五

「亂れたる世のたゞすまひばかり、哀れにはかなう、悲しきものはあらざりけらし。或は

きのふは勢猛に勝ちほこりしも、けふはあへなう身を亡し、或は、官位、位いみじきも、賤しき奴が従者となり諂ひ、朝に睦び交して、夕にあたみ戦ひなどもすめり。いと早うより参り仕ふる、西のみやこぐにのあるが中に、百濟は心穩々しう、新羅なん拗けてこはかりける。其王どもかたみに軍を起して、入り亂れ寇ふ。磯城島の金刺宮に天の下知し召し、おほん世の程になんありける。わがおほみかどに憂へ申して救ひの軍人賜ふ。將軍これかれ、許多の軍どもをゐて罷りて、雷のおどろくしう鳴るらんやうに、鼓打ちはためかし、虎のあたみ咆ゆらんやうに、管吹き鳴らして、捧げたる旗どもは春野焼く火と風に靡き射放つ矢は冬のみ雪の降り頻るやうに、旋風の勢見せて攻め戦ひけり。さこそ言へど、勝つも負くるも軍の習になんありければ、大伴の連の手は、高麗の軍人共を攻め靡けて、終に其の國の宮の内をさへに追ひ落したりけるを、川邊の臣が手に附きたる誰彼は、新羅の軍人に戦ひ負けて、あへなう將軍込めに擒はれにけり。それが中に、調のきしと言ひけるなん取り籠められたるながらに、猶心の猛かりければ、新羅人惡みて、劍を目前に差し



當て、筒袴を脱がせ、尻をわが大倭の方さし向けさせて、さてなん教へけらく「倭の君我が尻を喰らへと言へ、さらすは命取りてん」と言ひて、おどしにけれど「新羅の王我が尻を喰へ」とのみなん言へりければ、遂に斬られにけり。それが婦を大葉子となんいひける共に擒はれて居て、

から國の、きのへに立ちて、おほはこは、領布ひかふらすもよ、やまとへ向けて、と詠みて、いみじう泣きければ、心なき夷どもも憐れがりて、涙こぼしにけり。さるを此の川邊臣の、言ふかひなししれしき、矢恥やは知らぬ烏滯者ありけり。これも夫婦共に取り籠められにけるを、新羅人弄じて「朝臣や、婦と命と、何れ惜しき」と問ひたりければ、「何かは婦の一人を、大切の命にやは代へまし」となん言ひける。「さらば朝臣が今見る前にて、まろ、もてあそびてんとなん思ふはいかに」といへば、「命をだに生け給はらましかば、見ても忍ばん」と言へりけるなん。人笑なりける。然らんにはとて、男の見る前に引き出でにけり。女は呆れて泣き惑ふを仰向けふさせて、傍の軍人に、手と足を

左右に

衣なども掻いやりにければ、

けち

ゑんに見へわたりて、それだにいと心苦しきを、新羅人の

こちくしき

て、

なんありしものと、妬う心やましう、見つと思ふもかひなし。

昨日までは我が物とりやうじ

さはあらずて、こたみは

たにいみじき香をたき燻らし、怪しき薬を

てなん、暫し休らふ。夢

現ともなう泣き臥いたる女も、此の薬の氣に、心地時めきもやすらん、

迷り出づる湯の、

差しうかがひ見て、

出の旅をも、諸共ならでは越ゆとも越さじと、契り聞えし、我がうつくし妻の、仇し男と  
まのあたり見聞く心地、今殺されんとする命をも忘  
れて、悔しう搔き付かまほしかりぬべきをと、あさまし。やうくゆるされにけり。先づ



何よりも我が妻得つと、うれしくて、やがてより添へけるを、女はこよなう恨みふづくみて、「あるまじう、我が身を賣りて、いみじき恥を見せ給ひつればなん、更返り何かは」とけしうもて離れて、手近うだに、よせざりけるなん、ことわりにいとほしとこそ。」

「風俗 傾性野群卷」卷之二 八文字屋自笑作

(三) 月影は當世顔の丸山

和東内が丸山で遊興中、一人の唐人をからかひ、反つて其の裏をかゝれ、貰つた秘薬で一同ヒドイ目に遭ふ話。

「一尺斗の蛇貝の箱取り出し、是は大明太宗皇帝の勅方黄精枸杞子圓とて、齡を若くなし、て壽命萬歳の薬、お心入の忝き御禮に進上と、しみく申て圭貨賓は長崎を出船跡にて五三平和東内は女郎狂ひの徳にはいろくの慰、扱々唐のやつらはちゑがうとい、さまざまなぶり物にして遊ぶをかたじけなかり、またその禮とてけつかうな薬をくれた、年よらず

若さかりて好色せば、此世のたのしみ外になしと、かの薬を竹のへらに付てなめければ、其味甘露にしてにほひふん／＼あたりをはらひぬ、とりわき色里にゐるものは若いて持た顔かたち、女郎からやりてかぶろはいふに及ばず、其座に有あふ太鼓迄残らず所望してのみけるが、二三日過ると此薬のたゞりゆへか、五三平和東内床入れば桃灯で餅つくごとくに成、女郎はふさんかいへも響くやうなおならをこき紅ゐの脚布をやぶり、やりては物わすれして質札を人中に取落し、禿はうたゝねに小便たれ  
るをしらす、もんさくいふ太鼓はおしに成、家内残らずきたいのなんぎにあひける、千里萬里を股にかけて来る唐人が日本の詞をしるまいとはふかく／＼大ふかく」

「男壯里美八見傳」卷之三

第六回、信乃村雨を古雅に呈す

さて古雅の御所には後室於嬌の方、一向に  
になして、世に知られたる世悦の妙



薬はものかは、稀代の蘭薬、孫仲人の奇法、和氣姓の良劑、丹家の秘方、凡そ名の付いたる品は、探り求めて集められしが、聞傳ふ結城家に往昔一品の奇薬あり、名付けて之を村雨といふ。此薬を  
その心よき事、三年の間忘るゝ  
ことなく、男女共日毎に自然と心よく  
世にこの妙薬を、結  
城三郎の漏城とは呼びなせり。

これはくだらぬ

秘薬「村雨」の効能書が面白い。左に引用して置かう。

「村雨の能書」

それこの村雨は男女の  
のふるに等しく

降りそゞぐ村雨の如く、又この香を鼻に嗅ぐ時は俄雨

仇敵をも

然り

と雖も當座の

一度用ふる時は男女共死を

中途に縁を切ることあれば、恨む事甚し。又眞實に  
に入れて、線香を一本立て、終るを待ちて、

其の線香の半分立つ頃より、女

せしかと思ふほどなるべ

ければあらかじめその用心ある事肝要也。

「好色つや男」

これはいつの頃のものか？ 著者不詳。文體は初期浮世草紙の文脈を引いて居る。矢張り八文字屋あたりの作ではあるまいか？ 卷二。常嗜薬の付加減の大略を次に述べる。或る大家に勤める三人の女中が一日暇を戴いて浅草へ参詣に来る。其處へ此の本の主人公久米助も來かゝる。女中達は久米助を一目見て惚れ込み、呼びとめて、俄に腹痛を覺へる人があるが生憎薬を持ちませぬ。御人體を見立てゝお願するが薬を持つてお



出になれば頂戴し度いと話かけた。渡りに船と久米助早速茶屋へ引つ張り込んで三人に隨取りさせ、腹痛の  
に違ひない。 相當古いも

「姫美談語」仲々面白い事の書いてある隨筆で、其の中に次の一節がある。題して「紅毛の奇藥」

あるところの藥商人の家につかはるゝ男ちかきころ紅毛よりわたせし  
藥を得てけるがいかで其きゝめを  
うかゞひ日比懸想

つるに女はつと起あがりておくの方に走りゆきぬあとにとりのこされし男は手のなかの  
玉をうしなひたるこゝちして半時ばかりまでども  
にいともどかしが  
りて忍び足にておくの方に行きて見れば主が

障子のひまよりのぞき見れば  
にうちかけ

ら今宵はいかにかしけんその

てまゆねに八字の皺をよせわらはもまた  
もやすらんあな〜とてはては

ころのいさゝかのすき間より

すめり障子のそとに居る男はおのがひとたび  
きをおよひくはへてよそにのみ見るは腹だゝしくも又うらめしく

あやしくもくしき藥はつひにわが

見るめの毒となるもうらめし

とておのがもの



## 「色相畫文」

此の四巻物はどうも大阪本らしい。讀和として仲々奇智に富んだ働きのあ  
る作振りで、馬鹿にならぬものである。

江戸の仇を長崎で打

つと云ふ奇抜な話がある。其の發端は、

「所は名にし江戸日本橋の邊りに、丹波屋とかいへる大家、上様の御用も聞て、何不自由なき、身代ながら、生れ付て、かぼそひ骸不自由な物は、  
おもふにかん病

の大食したがるにことならず、

じやら〜云より我身

を忘れて  
此の先生が吉原通して三浦屋鹿子位女郎、淺妻と云ふに入れあげ、受け出して妾宅を構へさせた所が、此のお妻（淺妻の事）には古手屋の八郎兵衛と云ふ色男がある爲に、彼女自身は一日も早く此の境遇を脱して、八郎兵衛と一緒にならうと考へて居る。

「一日も早ふあの世へやる仕かけ、丹波屋何某、惚ぬいてはゐるが因果、地黃づくめに  
といへども、所詮枯木にうるをはぬ、雨露にひとしく、命も朝夕覺束なく成  
ければ、一門中の當惑どうこうの相談」

とうとうお駄佛となつて舞つたのでお妻は暇を貰ひ、釧谷の裏長屋で八郎兵衛と世帯を持つ。すると間もなく、隣へ彌兵衛と云ふ長崎通ひの唐物屋が引越して来て、獨身者の氣輕さからすぐ皆の者と馴染になつて仕舞つた。八郎兵衛も彌兵衛の話聞いて長崎へ下り、唐物を商つて見たい氣を起し、二人相談の上、先づ手紙を持つて、八郎兵衛が一足先へ下る事になり、彌兵衛は一足遅れて行く事に相談が決定した。八郎兵衛が出發した後で、話は本題に入る。亭主が出掛けてつてるのなつけ込んで腹に一物ある彌兵衛がモーションをかけ始める。

「彌兵衛はうそ〜とドレお慰みに、お目に掛ると、押入の挾箱から、唐木に彫物したる、ちいさい屏風取出せばヲ、奇麗な雛様の道具かへと、手を掛るをイヤ〜爰でみることは御無用、お貸もふそふもつて去んでとつくりと、見なされといふに付て、何やら奇麗な、細工、そんならちいとの間おかしへと、もち歸り、早速ひらいて、つく〜みれば、青貝細工の立襖扱もしほらしい細工じやと、手を掛れば、襖のあく仕掛内に象牙又は蠟石をもて、  
しかもつまみをねぢれば



へた、こまかい細工」

かゝる所へ彌兵衛がやつて来て、お妻をからひながら、南京焼の香合から、何か香を取り出して火鉢に焚く。此の香の匂を嗅いでお妻の心は益々亂れて来る。

「この香は唐より又一萬里も、西の國から出る名木おらんだ人と、心安うならねば、めつたに、手に入る物ではないと、いひ／＼又たもとから、雲南焼のちいさい徳利、水晶のこつぶを出し、是は紅毛の名酒、大切な物なれども、留守ごとに、少々お振舞申さふと」

お妻は遂に此處で

夫からと云ふものは、彌兵衛每晚忍んで来て、細香

には彌兵衛の爲めに泣人膏と云つて

流石のお妻も、これには敵し兼ね、遂

若い身空をファイにする。彌兵衛は、これを見すましてドロンをきめたば深い仔細がある事と巻末まで読み續けると、

あたら花盛の

「右彌兵衛は、元來江戸の産にて、前年お妻に迷ふて、腎虚のため死した丹波屋何某の弟、其砌長崎にて、様子を聞き、どうぞして兄の仇が報ひたいと、心を盡して、斯はからひ、思ひのまゝに本望をとげたと則彌兵衛が心易ひ方へ密に咄しき。誠に昔より諺にいふ、江戸の敵長崎で取たとは是ならん」

何んと諸君。オ・ヘンリーの短篇位の所はあるではありませんか？

此の位の所で今回は擱筆する。以前に發表したものを第一期とすれば、此度のは第二期の發表と云ふ事になる。もとより完全なものとは思つて居ないが、私の本領たる文献的秘薬研究について、躍然數歩を進めた事は自信を持つて斷言し得る。

此の次には現代世界各國の新娼藥、強精劑、處方の研究、さらに豊富なる逸話の蒐集、それに今日までの仕事を整理補足し、第三期發表に於て、權威ある文献的一本として世に出し度い希望を持ち且つ、そうする決心でもある。



らぶ・ひるたあ (秘薬論) 引用書目

- |                                       |  |
|---------------------------------------|--|
| (1) L'art d'aimer (Ovide)             | (12) Le manuscrit de Albert le petit             |
| (2) 希臘肥 (ホーチャニアス)                     | (13) Philtres magiques triomphateurs de la Femme |
| (3) 神聖指南 (シヨソホヘイドソ)                   | (14) Pratique des harems ma'ocains               |
| (4) 誓約聖書                              | (15) La magie naturel (Gambattista della Porta)  |
| (5) Le Kama Soutra (Isidore Lisenx)   | (16) Ratirahasya (泉芳彦)                           |
| (6) Le Kama Soutra (L. Lammaresse)    | (17) Ananga Ranga (佛譯及英譯)                        |
| (7) The Kama Sutra of Vatsyana (英譯本)  | (18) Le jardin parfume (Isidore Lisenx 及英譯)      |
| (8) Das Kama souterum (R. Schmidt)    | (19) Old nan young again                         |
| (9) 愛經 (大綱爲三)                         |  |
| (10) カーヴースートラ (泉芳彦)                   |  |
| (11) Le manuscrit. de Albert le grand |  |

- |  |                |
|--|----------------|
| (20) El Katab (Omer Haleby, Abou Othman) | (2) 茫茫方        |
| (21) 千手觀音治病合藥經                           | (33) 綠驗方       |
| (22) 龍樹方                                 | (34) 葛氏方       |
| (23) 如意方                                 | (35) 耆婆方       |
| (24) 靈符訣                                 | (36) 集驗方       |
| (25) 枕中方                                 | (37) 蘭房秘訣探賤春方  |
| (26) 延齡經                                 | (38) 飛燕外傳      |
| (27) 陶器方                                 | (39) 京本通俗小説二十一 |
| (28) 千金方                                 | (40) 杏花天       |
| (29) 玉房秘訣                                | (41) 金瓶梅       |
| (30) 玉房指要                                | (42) 娼婦叢史      |
| (31) 桐文子                                 | (43) 黃案沙論      |



- (44) 春畫奇談
- (45) 修眞實義
- (46) 色道禁秘抄
- (47) 春鬪折甲
- (48) 好色旅枕
- (49) 女令川
- (50) 小犬つれづれ
- (51) 男女懷玉體開節用集
- (52) 文のまさこ
- (53) 逸題 (女の……)
- (54) 艶道日夜女實記
- (55) 越歌國字解

- (56) 艶道通言文のゆきかひ
- (57) 萬寶智惠梅
- (58) 枕文庫
- (59) 春の若草
- (60) 女才學繪抄
- (61) 懷寶秘傳眞情指南
- (62) 閨中膝磨毛
- (63) 閨玉三十六佳撰
- (64) 實娘教繪抄
- (65) 花紋天のうきはし
- (66) 文志ねん
- (67) ふかのはやし
- (68) 筆の海大全

118

- (69) 江戸名所二十八景
- (70) 文のはやし
- (71) 陣取手事巻
- (72) 好色秘術集
- (73) 逸題
- (74) 好色智恵海
- (75) 妙々文庫
- (76) 地色早指南
- (78) 類聚名物考
- (79) 慶長見聞集
- (80) 松屋雜記
- (81) 野傾旅葛籠
- (82) 風流吳竹男
- (83) ひとりね

- (84) 倡賣往来
- (85) 海川諸魚掌中市繪
- (86) 醫學及醫政
- (87) 杏林内省錄
- (88) 本朝醫談
- (89) はこやのひめごと
- (90) 好色つや男
- (91) 姫美談語
- (92) 色相畫文
- (93) 不老長生
- (94) 支那娼業考
- (95) 支那の珍業秘業
- (96) 北京繁昌記

(以 上)



性的見世物考

(世界性的見世物案内記)





(一)

此の小論は實に面白い。きつと面白い。間違なく面白い。嘘だと思つたら、先づ次の目次を見給へ。それでも面白くないと仰有る紳士の左頬へは、予の右の掌か或は白い手袋が飛ぶ。

(二)

此の頃は目次丈見ると馬鹿に面白さうで、讀者の購入心理の瞬間の混迷を利用して、版を重ねる本がある。予もそれが羨しくなつたので一寸眞似をして見た。然し目次にある丈の事は確かに本文中に書いてあるのだから文句はあるまい？ 只面白く書いてあるか、書けてないかと云ふ點が問題だ。

(三)

目次程は實は面白くない。(小さな聲で)



目次

第一章 序論

第一節 見世物の定義

第二節 見世物の本質及其變態

第二章 本論

第一節 性的見世物の定義

第二節 變格性的見世物

宗教上の性的迫害——姦通刑罰——夏の夜の障見

第三節 本格的性的見世物

マルセイユ港の秘密宿——モンマルトルの夜——ルビエーの裸美人——  
 夜の箱——黒色天國の裸踊り——ロルゲ——猥劇——犬と女——薔薇の  
 花片——奉天喇嘛寺の淫怪佛——關帝廟の田舎芝居——一錢覗き——印  
 度人の寄席——摩鏡——活春宮——犬と女——笑而觀——銀座裏カフェ  
 ーの怪——横濱の銘酒屋——性的活動寫眞——金玉釣り——海士の鮑取  
 り——女相撲——天勝の肉糺袴——馬の————天の岩戸——伊  
 勢參宮——男女————蛇使ひの女——大道具————盲と女の  
 相撲——足齧の女

第三章 結論



## 第一章 序 論

### 第一章 見世物の定義

見世物の起源は、もとより、はつきりした事は、判らぬが、人間が好奇心と云ふ厄介な  
ものを持つ様になつた時、発生したと見るが妥當であらう。

人のする事を見たり聞いたりして楽しむのを見世物とすれば、見世物の範圍は極度に廣  
くなる。古くは神話、傳説に現はれた神々の競技から、希臘時代の體育技、舞踊等から、  
現在のあらゆる見世物を網羅する事になるが、然し今では見世物の中に入れる部分を、か  
なり限定して居る。

大劇場で行はれる、劇、歌劇、音樂會、或は運動競技の種々、繪畫、彫刻等の展覽會、  
これ等のものは見世物とは云はない。民衆的の多少低級な、興味本位の、手軽に見たり聞

いたりする事の出来る興行物を見世物と云つて居る様である。

興行物である以上、あらゆる見世物の根本目的は、民衆の意を迎へて、商業上の利益を  
得るのが第一である。其の點純粹の藝術的良心を以て計畫された、美術展覽會とか音樂會  
とかから區別されるのである。

即ち民衆の意を迎へる事が、見世物興行師の秘訣であるから、彼等は絶えず民衆の嗜好  
に對する觀察を怠たらない。従つて、各國の見世物を仔細に觀察すれば、其の國民の嗜好  
を明らかにする事が出来て、所謂各國の風俗史の一面を知る事が出来るわけである。即ち  
見世物は風俗史研究中の重要な一項をなすのである。

### 第二節 見世物の本質及其變態

元來見世物は人の好奇心を釣るものである。故に、一言すれば總て變態的のものである  
筈である。然しこれ等變つた物も分類すると、



一、單に珍らしき物。

二、非自然的或は人工的の珍奇物。

三、挑情を目的とする性慾的の物。

右の如くなる。

普通一般の見世物と稱するのは大抵(一)に屬す可きもので、珍奇な動植物だとか、曲藝だとか寄席だとか、手品だとかそうした廣義の見世物。

人間の不具者——例へば一寸法師とか大男とか云ふもの——或は人工を加へた偽物で客を釣る様な見世物は(二)に屬する。

(三)に屬するものは、讀んで字の如しだから説明までもない。但し、純粹に(三)として計畫された見世物も、——例へば上海名物の「磨鏡」とか、「活春宮」とかの如し——あるが中には(一)(二)の物に多少性的要素の加はつた様なものもある、それは、便宜上(三)の部類へ加へて置く。

そして第二章以下で筆者の説かんとする所は専ら(三)の性的見世物に就てである。だが物が物だけに、多少描寫の筆が謹嚴を缺くかもしれないが、其處はマア何分大目に見逃して置いて貰ひ度い。

## 第二章 本論

### 第一節 性的見世物の本質

現今の制度では、世界中のどの國でも、風俗壞亂の罪に一番抵觸するものは、勿論性的見世物である。従つて其の取締りは、淫書畫等の比ではない筈である。それにもかゝらず、世界至る所の大都市の裏面には、化膿した腫物の様に性的見世物と賣春婦とが根を下して居る。それで普通一般の見世物が表面的風俗史の好題目なれば、性的見世物は裏面的風俗史に絶對必要な重要項目であらねばならぬ。即ち、筆者がこゝに敢然として、多少



の不法法を顧みず、此の題目に筆を執つた所以である。

## 第二節 變格性的見世物

古代に於ては各國とも獨立した性的見世物と云ふものはなかつた様だが、古代の宗教的儀式は見様によれば大抵どれもこれも性的見世物と云へる。それから希臘羅馬の宴席に於ける踊り子や賣春婦の舞踊、或は東洋諸國の後宮や、富豪のハレムに於ける奴隸女の媚態これ等も性的見世物と云へぬ事はない。それから宗教的刑罰は偶然或は必然的かも知れぬが兎に角立派に性的見世物になつた例が澤山あるから興味がある。それは大抵異教徒が他宗の信者に加へた、改宗を要求する拷問である。

初期基督教時代に於て、基督教徒は異教徒から絶大の迫害を蒙つた。即ち基督教徒の女が罪される時には必ず賣春婦と見做して、邪神の犠牲にされた。若し女がこれを拒めば、忽ち引き倒され、裸體にされ、遊女屋まで地上を曳き廻され、其處で

に委せる

のである。

それから支那や日本では盛んに行はれた、姦通した男女を裸體にして衆人の面前に曝し物にする。これも日本の事だが、御承知の通り日本では着物を着て疊の上に坐る。それで一寸不品行な立膝をすると、股倉や腿が露出する。其の機微を利用して商家の細君などが此の立て膝をやつて

お客の好奇心を引いたものである。

以上の様なものは、別に見料を取つて行ふ見世物ではない。實にこれ等は性的見世物中でも變格の方である。この變格の性的見世物の中には、やつてる方の者が、決して見せる爲にやつて居るのではなくて、誰も見て居ないと思つて好きな事をやつてる所を、案外どこかしら隙見されて居ると云ふ場合も含まれる。此の他人のして居る事を秘かに覗くと云ふ事は、許されて公然と性的見世物を見るよりも遙かに魅力のあるものであるが、日本の様な明けつ放しの建築法を採用して居る都市では、此の隙見の快樂が存外多い様である。



夏の夜火の見櫓へ昇る消防夫は、夜も暑さに明け放つ家々の障子の内部で、煌々たる電燈の下に展開されて居る秘戯の有様を、望遠鏡のレンズへ赤裸々に寫すと云ふ役徳を持つのを樂みにして居るさうである。

或は又二階の手摺りにより夕方の暑さを湯上りの浴衣に風を入れながら、フト隣りの井戸端を見ると若い娘が行水をしてゐる。若い娘と云ふものは人が見て居ぬと思ふと、とんだ大膽なポーズをするものである。これも夏の夜の楽しい性的見世物の一情景。

### 第三節 本格的見世物

本格見世物とは、云ふまでもなく、見料或は會員料即ちお金を取つて見せる、實際的の興行物である。従つて其の演出も徹底して居り、秘密も無い。然し人間の好奇心と云ふ奴は、底まで破つて仕舞ふと反つて、萎縮するが薄いベールを一枚透して見ると云ふ方法をとれば、一層増大するものである。此の點本格見世物はあまり露骨過ぎて醜惡さへ感じら

れる。

明日 *Marsella* 港に着くと云ふ夕食後、きつと變な勧誘が始まる。世話好きの男が音頭取りになつて、ニヤ／＼笑ひながら、まるで恩にでも着せる様に、

「どうです、あなた、勿論いらつしやるでしょう？ 十人許り會員が出来たから、會費は安いものですよフフ……。イ、ですネ？ マア、此の港へ着いてこれを見なくちゃ……ハハ……」

こんな具合に十人許り説き付けて仕舞ふ。説き付けられた方も、勿論委細は知らぬが、其處は直感で、解つて居る。で顔見合せてニヤ／＼をやる。

十人が二臺の自動車に分乗して、マルセイユの街を盲、滅法に走る。やがて停車すると御定まりの路次裏。夜である薄暗い街燈の下を無頼漢らしい烏打帽が行き來する。注文通りの探偵活劇になりさうだ。一同多少恐怖に襲はれぬ者はないが、十人も居るんだから、まさか裸にされる憂はあるまいと元氣を出して案内者の後に従ふ。



ビヤ樽の様なマダムが出て来て愛嬌をふり蒔く。もとより一語だつて解る筈がない。内  
部はバーの様になつて居て、一同は思ひ／＼の卓子につくと、不味くて高いシャンパンを  
抜かされる。モウ皆ワク／＼して居るから、味も何も解りつこなし。其處が向ふのつけ目  
かも知れない。其の時、ふくらんだ財布でも見せたら、サー事だ。ウンとしぼられるさう  
だ。

それから愈々太夫御目通りへ控へましてと、其の太夫なるものが馬の様な大男に大女、  
そいつ等が、大袈裟に、よろしくやるのだから、まるで馬か牛でも見てる様  
で、こちらの、をそゝる所か、いつそ物凄くなつて来る。ことに

と云ふ演技の時なんか、流石に 呻つた。見ちやいられない。

巴里の夜は感覺的に明るい。

其の又華かな中心 Montmartre。性的見世物の一番普遍的なものは Revue である。ル  
ビユーとは、巴里で一番美しい女の裸體を、五色の光線の下に曝して、其の美しい裸體、

それこそ局部に丈特種の片を當てた本當の裸體が、出来る丈肉感的な動作をする所である  
最も大仕掛の舞臺装置、其處へ美男、美女の裸體が、花の様に咲き誇り、蝶の様に舞ひ狂  
ふこれは決して美文的形容ではない。實際は此の花や蝶が、氣の利いた科白を喋つたり、  
軽い小唄を歌ふのだから、猶更やり切れない。巴里へ着いた外國人が最先に引つ張つて行  
かれる所である。そして、巴里女の美しさを、つく／＼得心して味な心を起す所である。

此の Revue の中で最も有名なのが、Folies Bergere(馬鹿な安樂椅子) Moulin-Rouge  
(赤水車)である。

さて、すつかり神経を好色的に刺戟されてルビユーを出た我々は外の風に吹かれて頭を  
冷すと、又うまい白葡萄酒がほしくなる。大通りの人波は劇場を出た新しい波を呑み込ん  
で、一層景氣よく流れて行く。Rue de Douai には露西亞料理店 Termok がある。Font-  
ane 街路には Normandy, Troika, Nox-Bar, Omar Khayyam etc. 所謂夜の呑み場があ  
る。Pigall の辻の le Rat Mort(死鼠)なんか有名ですネ。



それからが Boites de Nuit (夜の箱とでも譯すか？ つまり一寸した舞臺付き酒場なり)これが亦モンマルトルの夜の名物でしてネ。

Le Perroquet, Florida, Hanneton……こんなのがあります。で先づ夜の箱の一軒へ這入つて舞臺でやつてる一寸したものを見ながら、例の白葡萄に水を割つて、巴里の味つて奴をやりませう。

サア、諸君の若い血が夜の巴里の味を一層切實に求め始めました。氣候はよく、酒はよし。冒険には持つて來るの夜です。Let us go! Martyrs 街から Cliehy の大通りを過ぎて、或る淋しい場所へ、我々の自動車は、この歡樂者達を棄てた。

小さな貧弱な一軒の家、二階には「家具附貸間」と書いてある札が夜の風にヒラ／＼して居る此處です！

薄暗い入口を這入つて廊下を右へ曲ると、突然廣間へ出る。其處は二ツの部分に分かれて、片一方は數個の卓子が並べてあつて、バーの様になつて居る。も一方の部分はダン

ス場である。熱っぽい、辛い匂ひが、安煙草やアルコールの匂ひと入り混ざつて、此の部屋を理想的の魔窟に仕立てゝ居る。半裸體の女達が公然と客を物色すること例の如し。此の部屋の奥に二階へ通ずる階段の裾が見える。今晚の天國は、此の階段の上にあります。天國にだつて上等下等がある。第一天國から第七天國まで試験の結果昇天を許されるさうである。で、最初から第七天國へ昇天しようなんて、虫がよ過ぎる。今晚の天國は第一天國だから、そのつもりで……第一、巴里へ來て三日目に最上天國へ昇らうとは、餘りに神を怖れぬ所業であらう。

所で其の第一天國は……？

一同階段を昇り切ると一室の扉を開けて中へ這入る。完全に黒色で統一された部屋である。奥にある特一番の寢臺は黒天鵝絨で被はれ、其の側にはすくんだ赤茶色の支那衝立、(屏風)がある。敷物も黒色の毛織物、それから黒色の寢椅子……

「まるで死人の部屋だね」と誰か々呟く。然し我が敬虔なる迷へる羊達よ。此の黒色天國



では、白哲、金髪の美人の裸體がとても印象的だそうです。どうだ！ *Parodie Noire* の有難味が判つたか？

一

と、どこからともなく、蓄音器が鳴り始める。一人の娘が、

日本の着物

を着たゲイシャ・ガールが光をあびて、無表情な日本踊りをやる。これが前藝。前藝と云つても、此の情景は悪くない。グット唾を呑み込む位の價值はある。

偕て、幕が上る。四人の十二分に美しい

の天女達が、絹の靴下丈はいて……それ

からは天女達の素晴らしい

、諸君の目尻が下るのは、是れ如何に？

*Larger* *with* のがあります。つまり覗きですネ。パリジエヌ (*Parisienne*) には存外茶人が多いから、黄色人種も亦、別な風味があるはネーとか何んとか云つて、案外もてる事があるから、一概には云へぬが、然しもてたと思つて、いゝ氣になつてると、隣室で所謂ロルゲ的になつて居る事があるから御要慎ある事。旅行案内に此の一項が洩れて居るのは、大變な手落ちだと、筆者は思ふ。

最も嚴格だと云ふ評判のホテルでボーイ長が變にニヤ／＼笑つたら、占めたツと思ひ給へ。嚴格なホテルに於けるロルゲは給仕長の餘徳で、従つてうまく行くと、本當の尊敬すべき、淑女と紳士との愛の闘ひと云つた感激的場面を見る事が出来る。西洋人は由來

だからネ。

豊満な、眞白な、艶々した、

牝鹿が長椅子、卓子の間を抜けてスルリ／＼と逃げ

る。それをこれも

黄色い、足の短い、髯の黒い、目の釣り上つた、頬骨の飛び出し

た……どうも悪い形容ばかりで、御氣の毒だが、事實だから致方無し、……東洋の狼が牝鹿を追ひ廻す。どうして仲々掴まらぬ。狼は夢中になる。漸く掴へると、

……

其の翌晩。自分の部屋の贅澤な安樂椅子に埋まつて、身分高き此の東洋の大官は、昨夜の光景を思ひ出して、ニヤリと笑を洩す。それから外出の仕度にかゝる時、二人の外國紳士が訪問した。東洋の大官は一寸嫌な顔をしたが、兎に角面會して見ると案外にも、彼女



からの使ひで、國への土産として活動寫眞のフィルムを一本贈ると云ふ口上である。大官は極上の氣嫌で、即座に試寫を見る事を要求する……。

三十分後二人の紳士が歸ると、此の大官はフィルムを持つたまま、何んとも形容の出來ぬ溜息をホツトついて、自分の部屋の贅澤な安樂椅子へ埋まつて仕舞つた。

翌朝正金銀行から彼の振り出した小切手で莫大な金を引き出して行つた巴里娘がある。何が彼にさうさせたか？ も一度其のフィルムの試寫を見れば判る。こんな性質のわるい *Larger* に引つかゝつたら萬事休すだ。だから轉ばぬ先の杖、女に持てたら、*ロルゲ* と思ふか。

次には中世紀の淫劇の名残りを受けたものが存在する。淫虐狂 (*Sadismus*) や被淫虐狂 (*Masochismus*) の物凄く所から、*Obscene* の實演と云つたものは勿論秘密な場所で行はれるが、モンマルトルの中等芝居なんかでは、姦通劇の大流行、舞臺の上で細君と情夫とが、這入る所まで平氣でやるのだから恐れ入る。

それから……それからが愈々第七天國ですな。此處まで昇れば神や基督と同居が出来るさうです、アーメン。(Amen)

抑々、女つて奴は人間の牡の次には、犬の牡が好きな様ですな。其處で犬と女。第七天國。オ、神よ！ であります。

先づ犬を馴らすには大抵牛乳を用ゐるさうです。牛乳を

犬の鼻先へ出

す。犬が甜める。又々牛乳、又々甜める。*Le bon chien* 人間の牡の次に、犬の牡が好きであつた女が、犬の牡の次に人間の牡を好む様になるさうですから、其の猛烈さも想像されようと云ふものです。此の見世物はつくづく人間の牡の貧弱さを痛感させる丈でちつとも愉快でない、見た者は誰でも云ひます。それを押して、詳細に語れと仰有つては、あなたの御人格に障りますよ。

其の他春畫活動寫眞、これは見る人によつては、實演よりも有難い。それから *Gentil* な、見世物として理想的な奴は、*Fouille de rose* (薔薇の花片) 即ち一法金貨を卓子の角



から、生き／＼した薔薇の花片が吸ひ取らうとする……壽命が三年……オット縮む見物である。

元來性的見世物と云ふ以上、どんなに考へたとて、結局は動物雌雄の性的行爲を色々の方法で複雑に見せるより仕方がない。だから其の表現方法は國々によつて種々異なる所もあらうが、根がそれ丈の事であるから、そんなに色々の種類のある筈がない。大抵どの國のものでも似たりよつたりである。で、甚だ概略ではあるが、右巴里見世物見物を以て色の白い人種のそれを代表させ、今度は故郷東洋へ引き返して、色のある人種がどんな見世物を考案して、性欲昂進の強壯薬として居るかを調べて見よう。

支那は森羅萬象の百貨店である。殊に性欲には徹底した所、豈面白い見世物の無からんやだ。だが筆者不學にして、大した事は知らない。不學の僻に性的見世物考もないものと、そう頭からやつつけられては一言も出ない。黙れと云へば金輪際黙る。

エ？ あゝそうか。では話す。

これは見世物ではないかも知れぬが、金を取つて、變な物を見せるのだから矢張り見世物と云へぬ事は無からう……。前置する程のものでもないが、奉天を訪れた時、先づ氣候もよく、天氣もよいと來て居たら、郊外散策の序手と云つた呑氣な氣分で、車を北陵へ驅るであらう。さて北陵の見物がすんだら、……是非にとは云はぬが、とに角物好きな心を少しでも持つて居る人になら、筆者はほんの少しの廻り道だから、近所の喇嘛寺を訪問する事をお勧めする。但しとても大變な路だから、餘程腰のバネを丈夫にして置かぬと、車が痛む前に腰が痛むから御注意下さいと云ふ程無法な路だ。其の無法な路を、思ひ切り亂暴……尤も自分が人間だと云ふ自負心を持つて居たら、とても此の路は車に乗れない。先づ豚にでもなつたつもりで居るのですな……右手に見える面白い形をした石の塔を目當てに進む。一廻りの扉の外をグルリと廻つて、やうやう入口を見付け、寺内に入る。正面の奥に本堂がある。多分坊主だらう、三人許り出て來る。向ふもこちらの目的は先刻承知だ。本堂の扉には大きな錠が下してある。此の錠の前で問答だ。單刀直入に How much?



とやる。平氣なものだ。一圓だと云ふ。もう此の奉天では日本の金が奉天票なんかより信用がある。一圓だと云つて、後でもつと呉れろと云つても駄目だぞ、と念を押す。押さねばいかぬ。御大盡風をしてるときつと肝心の所で追錢をとられる。

此の交渉が纏まるとやつと鏡を外す。内陣へ這入る。狭いが存外きちんとして居る。勿論森殿だとか何んとか云ふ氣分はない。普通の佛様が左右にすらりと並んだ中央一段高い所に黄布で被はれた天地佛の顔が見える。祭壇へ梯子をかけて、一人の坊主が、本尊の黄布を捲り上げる。

の歡喜佛の尊體が現はれる。無遠慮に側へ行かうとすると、坊主が待てと止める。何んだと云ふと、先づ禮拜せよと云ふ。なる程本尊の前の祭壇に大きな香爐があつて、白米が入れてある。其の中に今貰つた五十錢銀貨が二枚。喇嘛の佛様、女も好きだが、金も好きだな。それへ線香を立て、勿體らしく尊體を拜めと云ふのだ。何んの事はない、

を拜む様なものだ。とに角一同代る  
くお尻を拜む。それから梯子を昇つて、もつとよく見様とすると、それ丈は許さぬ。強

いて梯子に昇る必要もないから止めた。尤も、喇嘛の怪佛は北京雍和宮にあるものが代表的であつて、これを見た人は奉天のものなんか、ちつとも見る必要はない。

田舎の關帝廟などのお祭騒ぎの時、いつでも興行される猥褻劇、これなんかは一種の郷土名物として、保存してもいゝ位のものだ。

それから上海ではよく見るが、一錢覗きである。一人で小さな覗き屋臺を擔つて來るのは大抵日つきの代物である。巡警の來るのを注意しながら、バタリ／＼と畫を替へて行つて最後の一枚が御樂しみ、へい御退屈様と云ふ奴で、愚にもつかぬ畫を見せる、朦朧覗き屋、然しこんなのは論じるに足るまい。

つい去年あたり上海は十六舖の附近に印度人の寄席があつた。眞黒な女達が色々な樂器を持つてグルリと安座する。御客の視線が、しきりに變な所へ飛ぶ。賑かな樂が奏し始められると、十二三の露西亞娘が踊り出す。まだ

それが素晴らしい勢で跳ね廻る。此の一團は間もなく姿を消した。官憲の



壓迫があつたと推察される。

秘密と稱せられて居るものでは、フランス租界に於ける裸ダンス。上海名物の磨鏡それを卒業すると活春宮それを卒業すると……磨鏡は磨鏡とも作る。

此鏡奇厚日、摩千摩而不碎

在大衆男子前、大做其赤膊

全く面の皮の厚い鏡である。あれだけ摩擦してはなる程 筈である。此の磨鏡

は支那人が見るのと、外國人が見るのとは、値段も時間も違ふ様だ。支那人の時には十四五元で一時間位は普通ださうだが、外國人の時は二十元以上は取られる。時間も三十分やればイ、方である。

活春宮。春宮とは

それが生きて動くのだから、活春宮。これは磨鏡よりは多少高いまづ二十元から二十五元位。だが支那人ばかりが見るのなら、これより安い事勿論

である。これも演者の下襦袢を脱がせるに一元かゝる。襦袢なんか無理に脱がせなくともよさうだが、やはり其の其處はネ……とに角一元餘分にやつて襦袢を脱がせる。すると運よくいゝモデルにぶツつかると、とても有難い。然し、運悪く變なモデルを連れて来た時は、遠慮せずに、取り替へさせる。多少餘分にさへ出せば變替自由であるのは流石によく出来て居る。さて演技だが、普通十二様式、二十分内外である。男は勿論

強ひて云へば

何んしろ商賣だから偉いものである

所が、本當の活春宮と云ふのは、そんな生盪いものでなく、と云ふので、

入り代り立ち代り参るまでやるのだ、時間も一時間は充分かゝる。其處まで見なくちや通でないとの事。

これ等、磨先生や活春宮居士等は自分の家で、これを行ふ場合は殆んどなく、大抵は日本に於ける待ち合と云つた家へ出張する。それで二十五元取つても、手取り金は案外少い



此の商買亦つらいかなである。

元

ある金持ちの娘が、フトした事から犬の味を覺えたと言つても別に犬のすき焼がうまかつたと云ふのではない。一匹の犬の味を覺え、二匹の味を覺え、今では數匹の犬の味を覺えて、人間の味を輕蔑したのである。で、それ等の味のよい犬共は綺麗な衣裳まで着せられて娘の愛を人間の手から完全に奪つて仕舞つた。所が又フトした事から、犬の味を如何に楽しく満足して味つて居るかと言ふシーンを今度は人間に見せる事に興味を覺えた。彼女は商買道具として犬を愛するのではない。だから彼女の機嫌の悪い時は百金を以てしても如何ともなし難い。其の代り具合のいゝ時には、只でも其の　　を惜まなかつた。だが最近我々は彼女の消息を聞かない。筆者は色々手を廻して探つたが矢張り解らぬ。最後に知り合ひの或る女將に聞いたら、可愛想に、其の肝腎の犬を悪い英國人が蹴殺したとやら云ふ話。

奇想天外と云ふ事は、誰が何んと云つても支那人の專賣にして置くがよい。これなぞも

其の一例、あまり馬々しい戯作だが、支那料理では中休みに水菓子が出る事がある。それに倣つて口直しとして御覽に入れる。

南京路大慶里に湖南出の二人の妓女がある。母子と稱して、母の方は三十許り、娘の方は十七許りであるが、二人とも容貌は大して美しくない。然し流石に娘の方はとても素晴らしい眼を持つて居て、人の心を惹くに足りる。服装も別に他の女と違つて居ない、冬季頭戴貂帽、身穿狐袍。噲傳精美的雪花膏。香氣四溢、神致飄然。双足瘦小、尤爲特別、雖知足小、不適于時風、但亦無法使足長大。此の團點の所なぞは仲々面白い。淫文先生亦一見識ありか。

所が此の母子は妓女と稱しながら、夜御客が宿つて行かぬ。其の上花代が一般の妓女から見ると、甚しく高いのを見ると何か母子には立派な秘術があるに違ひない。

世に「口技」(日本の八人藝)と云ふものがある。一人の口から様々の聲を發するのである。以て奇とするに足る。然るに母女二人的　　竟有特別的奇技。也能發音說話。豈不較

元



「口技」爲更奇麼？客があつて、愈々其の藝當を見る幕になる。其母露其體、睡于床上。兩足高擧。用二幅白綾、左右分掛床頭、兩足擱在綾上。因其時候甚長。足若久擧、必受酸痛的苦。兩腿既分。向外。視于客前、戸前置有丸彈一堆。大如桂圓。此の丸彈が、金銀、銅、錫、鐵、紅木、白木、外、外……都合二十四種ある。これを一ツ一ツへ入れると、がそれに従つて色々な音を發するのである。二ツ三ツ例を擧げると、

以金丸入

牝内像聞六七十歳老人吐痰聲。以白木丸入

以翠丸入

像放屁聲。

娘も亦此の藝がある。而發音較母更爲清亮。听者益入耳。

以紅木丸入

發言道、再會々々。

以綾丸入

發言道、小和尚來哉。

之等の見料は每次百金と云ふから大變である。お客の中には娘のを聞く者、母のを聞く者、合奏を聞く者色々ある。其上此の母子の 更能縮小、如三才女童的 一樣。

也能放大、如牛馬之 者。其 又能吃茶一巨杯。能吃黃酒二斤。以下は見世物に關係がないから略す。

フランス料理を食べて、支那料理を喰べたから、次は日本料理と云つた所だが、何分現代の日本と云ふ國は、支那に次いで君子國だし、アメリカに次いで文明國であるから表面上性的見世物なんて不潔不道德な代物が存在する筈はない。が、それは表面丈のことで、内秘では、色々なものがあるだらう。現に新聞にはよく猥褻活動寫眞や風俗壤亂カフエーの事が出て居るではないか？なる程確に出て居る。が、それはですネ、如何に清い水でも檢微鏡的調査をやれば、必ず塵は出る。それと同様に、日本の警察は清水の中から塵を發見して、盛に新聞を賑す程、發達して居る。以て日本國の文明の程度が解るだらう。と云ふ理屈になる。

其の塵の中から二ツ三ツ拾ひ出して見る。世界の大都市東京は銀座のすぐ裏の或るカフエーで酔つてくると、女給達が歌に合せて、



横濱の酌酒屋で、チヨンキナ／＼で一枚宛着物を脱ぐ奴は、見世物と云ふより、一種の遊びの方かもしれん。専門的見世物として目下一番有力なのは性的活動寫真だらう。一時騒だお産の活動寫真。(尤もあれを性的見世物の中へ入れたら叱られるだらうが)日本製の普通性的寫真は二巻二百尺位で相場は

一回の映寫料は

橋の

上で身投げの女を助けた武士が、變な心を起して

も刀が邪魔して具合が悪い。捨つ可きものは弓矢なりけりと云つた滑稽なもの。或は強盜が居直つて主人を縛り上げ、

それを障子の外から下女が見て、

になつて来る。其處でこちらから泥棒様へ据膳すると云つた不届な物、

大寫して其

の 少々氣が重くなるネと云つた代物、斯う書いてくると如何にも筆者が、其の道の達人の様に見えて、問ひ合せなんかと来ると迷惑だから此處にはつきり聲明して置く。これは皆風のたよりや人の噂でしてネ。

あの藝者や幫間に金の力で性的の動作をさせる。實に成金趣味の惡趣味である。筆者は

敢て道徳心に問ふ迄もなく、感覺的にあゝした行爲を否定する。何んとならば、藝者は藝者、幫間は幫間の意氣と藝とをあらしめよである。之許りは筆者頑強なる復古主義である。今は無いが、一時淺草に、金玉釣りのユーモラスな見世物があつた。太夫は大金玉の男助手は三味線引きの女。先の曲つた硝子の棒で、其の大金玉を釣り上げる。こいつ仲々うまく行かぬ。うまく行つたら御手拍子の上に、褒美として、女が一寸ハツ入らはい〜。

本郷のある飲食店の二階から隣りの女湯が覗かれる。其處で一高生徒の專屬店になつたとか、眞疑は知らぬ。

横濱に外人専門の裸ダンスがある。日本人は拒絶する所に悲慘やら滑稽やら。

日本で三番目の大都市名古屋の大須觀音境内は丁度東京の淺草に匹敵する歡樂場。今では最早や見世物の小屋掛をする餘地は微塵もないが、昔は此處にありとあらゆる見世物が集つた。筆者の子供時分の記憶では、鮎取りと云ふ見世物があつた。硝子張りの水槽を禪



一枚の海士が泳ぎ廻るそして水底へもぐる時客は満足したさうだ。奇妙に此の興行は嚴寒にのみ行はれた様だつた。

それから筆者の覚えて居るのは女相撲。これはどこと云つて、とり立てゝ性的の所は無かつたが、取り組みながら盛に巨大な尻を振る時、子供心に變だなと思つた。女相撲の様式は、最初は襦袢無し、本當の廻し一本だつたが、だんくゝ猿又をつけ、襦袢を着る様になつたと記憶して居る。

筆者の高等小學校時代と思ふが、名古屋の末廣座へ奇術の天一一座が華々しく乗り込んだ。まだ娘時代の天勝の人氣が素晴らしいもので、見物人は懸値のない所満員で、花道から舞臺まで坐り込んだ。何が目的でこんなに客が詰めかけたかを今から考へて見ると、フムあれかと首肯されて、苦笑が思はず唇頭の上つて来る。現在の天勝夫人はもう忘却の淵へ昔の事は、押し氣もなく叩き込んだであらうが、あの時の數千の人に交つて居た一少年が今だに覚えて居るとはやはり印象は強かつたと見える。藝題は何んであつたか忘れたが、

とに角舞臺下手に高い壇があつて、其の上に、大きな蝶の羽根で、すつほり身體を包んだ美しい天勝が立つて居る。舞臺は薄暗い、すると強い五色の光線がサツト天勝に注がれる羽根が除々と擴げられて行く。すると強い五色の光線がサツト若さ其の物と云つた素晴らしい天勝のすらりとした全裸の肉體へ……オツトそんなに乗り出し給ふな。何、高が肉襦袢々々々。

これがウンと當つたと見えて、其の後又末廣座で他の一座がこれをやつた。其の時の女はやはり美しかつたが、舞臺の端へ出て来てやつたので、肉襦袢がよく判つて頗る興冷めだつた。それからは公開の興行で、これ丈露骨な事は見なかつた様に覚えて居る。

年代が少し遡つて明治の初期になると、最早や筆者は何事も知らない。其處で今度は當年の某粹士(今でも某粹老人だが)の話の受け賣りをしよう。受け賣りだと云つて、仇やおろそかに聞いて貰つては困る。品物に嘘や偽りがあつたら御目にかゝらぬ。

つらく(と大きく出て)當時の性的見世物界を見渡した所、丹羽郡飛保村曼陀羅寺境内



の見世物が、其の最高權威であつた事は否定出来ぬ。筆者の知人某粹老人は實に此の曼陀羅寺通の歴々であつたんだから、氣が強い。

美

偕て、粹老人の曰、

「わしの若い頃は、云々」で始めると話が長くなるから、恰も筆者自身が見て来た様な顔をして書き流して行かう。

馬の 雌馬の四足を棒杭にしつかり縛りつけて、雄馬をかゝらせる。仲々うまく

其處で人間の助手が石鹼を塗つた手 一升も眞白な

女のお客は思はず踏み込んで仕舞ふ。一體こんな雄大な光景を女なんか見に来るのが圖々しい。それこそザマ見ろだ。

次は例のヤレ吹けソレ吹け。此の天の岩戸も色々ある。普通昔からあり来りのは、「蕨園」の小屋を造り中央に床を置き床上又胡床等を置き若き女に紅粉を粧させ華な古袴を着せ古の胡に腰を掛させ女の背腰以下板壁にて木戸外より女の背を見せ髪飾多く袴を着せ

の板壁に掛け美女を畫て招牌を木戸上にかけて八文計の錢をとり女の衣服裾を開き 一升も眞白な  
し竹筒を以て吹之時腰を左右にふる衆人の中吹之て笑ざる者には賞を出す。 を顯

右の見世もの他日は稀也江戸は兩國橋東に年中一、二場在之小屋及び女の扮同前或は片輪もの因果娘蛇遣の類専ら を曝て見世物とす是亦専ら八文。

三都ともに右の女濃粧をなし髪を飾て背姿甚美なれども其面は醜婦多く稀には中品の女もあり又中には美に近きもあり」(守貞漫稿第三十二編雜劇下)と云ふのだが、此處のはそんな生温い貧弱なものでない。先づ相當の大きさの小屋掛舞臺、數人の下座が三味線を以てズラリと並ぶ。すると三人から四人位の太夫が舞臺前面に立ち現はれ、シャン／＼と云ふ三味線につれて、例のヤレ吹けソレ吹けと

舞臺一杯に盛に活動

する。それを馬鹿が火吹竹で吹く事、笑はずに吹けば褒美が貰へる事、笑はずに褒美を貰つた神經遲鈍患者は一人もない事、昔の通りである。但し此の時分は木戸錢は十二文であつたが、唄の文句は相變らず吹いても吹かんでも八文じや。と八文を此の見世物の代名詞



の様を用ゐて居た。前記江戸兩國でやつて居た單純靜的な奴より、動的複雑な此處の方が當時の人氣を捕へたであらう事は、今日からよく想像される。

この天の岩戸といふ見世物は、何んといつても日本性的見世物の首位に置かる可きもので(首位とは最も凄いと云ふ意ではなく、最も普通的であつたといふ意味である)江戸末期の發明だと思ふが、いつ誰が始めたといふ事は勿論不明である。前に引用した江戸兩國に於ける此の見世物の記事の出所である守貞漫稿には又大阪に於けるその記事も出て居る同書第二十三編正月十日、大阪南今宮村戎社詣の條下に左の如く出て居る。

「又今日官倉邊の野外に席張の小屋を造り婦女を出し竹管を以て觀者吹之觀場二三所あること恒例の如し。

を觀物とすること大阪は此兩日(筆者註、正月九日、十日)のみ江戸は兩國橋東の小屋にて、年中行之也」

明治十七年四壁庵茂篤著「忘れ残り」讀燕石十種第一卷に「可恥見世物」と題して、

「兩國又は山下に小屋を掛けて、若き女

また一人は赤き

切れにて

をつくり竹の先へは、彼の所を突く眞似をしながら、やれつけそれつけ

やれつけそれつけと云ひて踊る、女はあてゝ見るならあてゝんかと云ひて、三味線のはやしに合せて、して見せる」

之で天の岩戸の見世物は吹くのと、突くのとがあつた事が判明する。尙名古屋有名の萬松寺境内も大須や東本願寺境内とともに同市に於ける著名な興行物地帯であつた。其の萬松寺境内に某氏の談によれば、(某氏は今四十歳位で、其の小學時代に覺えがあるといふのだから、少くとも明治半ば頃、明治二十年から二十五年の間だと思ふ)ヤレ吹ケ、ソレ吹ケがあつたさうである。普通のとは多少相違して居る様だから、左に記して置く、

境内の正面觀音の扉を半開(錦欄にて弘法大師の卍の飾あり)にして竹の管で開扉し、吹かせる。若し客の中でお賽錢を上げる者がないと、厚化粧の觀音様は自らして見せる。云々。



此のヤレ吹ケ、ソレ吹ケに似た見世物は、まだ外にある。一筆芥の「魂膽夢輔譚」三編卷之中、出目助が保九郎の女房の鼻の下の腫物を治療して貰ひに夢輔の所へ連れて来る所、「……まづふみだいに腰をかけさせ、半びやうぶをうしろへ立たところ、へびつかひの娘か親のいんぐわが子にむくツたといふ、あしにけのはへた女のみせものゝごときかたちゆゑ、そばにゐる眼八もをかしく、ふき出すほどに思へどもこらへゐる。夢輔はありのとわたりのできものを見てやらんと女のまへのはうへまはりまむきにすはりて、

思はず眼八はなうたをうたひ出す、眼「色のウ世界に引色なき者はア引チツテチリチリチ、リチチリチン」ト口さみせんでおもしろく唄へば出目助も浮れて、出「こりや〜、まだこりや天の岩戸をおひらきなさるぞチツテチリチリ〜」とはやし立て、おどり出すゆへ夢輔もひやうしにうかれ、女のきものをまくる是はりやうごくあたりに女のこしをかけてゐる前へちいさな人形のはやしにつれて、ひよい〜とくびを出すみせもの

ありて云々。

さて天の岩戸も首尾よく開いたから再び曼陀羅寺へ歸る。「御入部伽羅女」の卷の五に、「……鑑板を見まはる中に大なる枕繪書女はふり袖生國は備後の福山れき〜なる人の娘參宮の道で仕ぞこなひ男は廿五見ぬ事ははなしにならず……此見世物咄の種とむりに大臣いざなひ見れば豎島の大夜着へむすめと男を上にして片ほとりに參宮の手みやげ……」此の伊勢參宮の見世物が、曼陀羅寺にもあつた。娘と若者とであれば、まだいゝが、此處のは、とが亡夫の追善の神詣り道中で、仕くじり、其の罰で 爲め衆人に見せて罪滅し、といつた口上である。

舞臺正面に蒲團を敷いて、三十位の女が十一位の男の子を

々やつて見せる。其の中に口上云ひが、今日は子供の具合が悪いからうまくやれない故、

母親の 御覽に入れると胡魔化すと、女は 子供はクル

リと女の後へ隠れる。それから所謂母親は 田舎の見物は遠慮が



ない。「モット

……」と怒鳴ると、

そうして……此の母親

は大して美人でもなかつたが、まんざらでもなかつたので、此の一座はいつでも大入満員世に好色の種は盡きまじであつた。

明治五年四月の「愛知新聞」第十一號、

「開明ノ時ニ當リ佛事ノ盛ナルハ佛氏ノ所謂不可思議カ縣下二月朔日ヨリ以來開張アル凡ソ四十六ヶ寺ナリシ右開張ノ内丹羽郡飛保村曼陀羅寺ハ格別發向ナリ觀セ物殊ニ多シ就中奇ナルハ男女ノナリ幕ヲ開ケバ一幅の

ト實ニ殷紂沙丘ノ後

三千年會テ公然ト見ル者ナシ或人曰此ノ如キハ文明開化ト云ハン歟將タ自主自由ノ權トセシ歟」(外骨著「明治奇聞」三)

かくして飛保村の曼陀羅寺は日本の性的見世物に於けるオースリチーであると云ふ事に諸君御異存がありますかツ?

尙此の外的性的見世物(江戸末期より明治の初期に行はれた)といへば、

蛇使ひの女。

實見談によれば、蛇の鎌首丈押し込んでダラリとぶら下げる丈ださうな。尾ま

で蛇を入れて仕舞ふなんて勿論ヨタである。

大道具。

これで

打たして見せた。

引きのばし結ぶと云ふんだから大變な物であつたらう。

盲と女との相撲。

女關取に振られた野暮な客が、盲の關取りにいくらか握らせて、土俵の上で女關取に悪戯をさしたといふ様な挿話もある。

足藝の女。

肝腎の藝より緋禪からチラツク所が見所であつたであらう。



### 第三章 結論

何か世の中に變亂が起ると、きつと性的研究が盛んになる。そうした現象には色々な理由もあらうが、第一は人間の洗練され或は監禁されて居た本能が、直截に覺醒してくるからである。

文明社會が一番怖れるのは、人間本能の野獸性が覺醒する事である。それで先づ道徳といふ道具を發明して、人間本能の洗練といふ事業に努力した。それでも駄目な層には法律といふ手錠をかけて容赦なく監禁して仕舞ふ。

性的見世物なんて物は、どこから、どう見たつて、我が文明社會に存在を許さる可きものでない。よろしく、道徳と法律との力によつて、此の惡魔の林檎を我々の眼前から消滅させねばならぬ。

斯うした高遠の理想の下に、お歴々の僧侶、道學者、官憲、盾の半面を代表した時の紳

士と淑女との共同努力によつて、社會は愈々淨化して行つたのである。

明るい半面には必ず暗い半面がある。

いくら道徳と法律とが、夢中になつて驅け廻つても、人間の本能は當分去勢されるとは思へない。と、同様に、いくら洗練と監禁とが活動しても、性的猥褻物が一掃される筈もない。教會で牧師が神様を諸君に紹介してゐる時、教會の建物の影では惡魔が猥褻眞を賣つて居る。世の中が立體である以上、明暗と影日向は附いて廻る。此の世が神の思召しによつて、東京地下鐵の照明装置の様に無蔭影照明になる迄は、どんなに借家法を研究しても、闇の家に居座つて居る、ロクでなしの店子共に店立てを喰はす事は不可能であるときらめねばなるまい。



ダンス・エロチック





ダンスと云ふものは誰が何んと云つたつてエロチックな代物だ。古代ギリシヤ、ローマの生殖器神祭禮の亂舞は云はずもがな、スパルタの婦女子が裸で踊つたのも、單に體育の爲ばかりではよもあるまい。ローマの上流社會が宴會でも開けば、必ず裸踊専門の踊子や六弦琴引きを呼んで、お客を歡待する。

グット時代を飛ばして、一九二九年の現在巴里あたりのミュージック・ホールでオペラ座出演の名女優よりぐつとシヤンなベル・フィユ達が盛んに

特種サルマタを

オルケストラ席の好者達に見せつけるのは、何んの爲だ。お自慢の肉體のエロチックの魅力を發揮して、あわよく年頃の狼を捕へて馴らさうと云ふ下心じやないか。

日本の舞踊だつて其の通りだ。彼女達のキモノの上から流れ出す肉體の線の魅力は斷然性的の要素が大部分だ。わしはあの線の運動を藝術的にのみ觀賞するつて？ よせやーいである。藝術的陶醉と性的陶醉とどの位違ふ？ 小生上品ぶつた男が一番嫌ひです。

文明人は海老に衣をかけて天ぶらにして喰食する。未開人は海老其のまゝを喰ふ。註に



曰、海老とは性的舞踊の事にして、衣とは藝術なり。だから衣をかけた天ぶらより海老丈の未開人のダンスの方が一層はつきり其のモチーフを現はして居るので、侮蔑所か一種の敬虔な心持ちさへ起きて来る。彼等の性的舞踊は、全く本能の發露で、文明國のカフェの奥の間で見る、しつこいのに比べて嫌味なくいつそあつさり觀賞出来るものだらう。

あらゆる未開人はどれもこれも性的ダンスを持つ。それをコクメイに集めて寫眞でも入れて發表したら、さぞ面白い仕事だらうとは衆々思つて居る。然し學者ならぬ小生なんかには、さうした根氣がない。暇がない材料がない。三無齋と來て居るから、あきらめてさう云ふ根氣仕事はドイツの學者にでもお委せして、こちらは手近い所にある材料から數種未開人のダンス・エロチツクを御紹介申さう。

いつも例に出すルネ・マランの傑作「バツアラ」の中にはアフリカの黒人間に於ける性的ダンスの熱狂陶酔振りを實に生き／＼と活寫して居る。高瀬氏の翻譯があるが、當然其のクライマツクスの點は伏字になつて居る。其の伏字になつて居る所を原書から引用して紹介

したいのだが、勿論駄目だ。仕方がないから、梗概丈を話さう。

酋長バツアラの愛妻が一人の女を相手に舞踊する。愛妻は  
をぶらさげて  
男の役をするのである。踊が高調に達すると周圍に座つて、はやし立てゝ居た男女が互に興奮して來て勝手に性的行爲に移ると云ふのだが、如何にも黒人の體臭を嗅ぐ様に思へる巧みな迫つた描寫であつた。原本は別に手に入り難き本でないから、心ある方は一讀せられたらう。

以下主としてアフリカ黒人間に行はれるダンス・エロチツクの紹介を試みて、アジヤ、アメリカ、群島地方のものは追々期を見て、研究發表する事にしやう。

セネガル地方の連中はダンスを持つて居る。そのダンスが戦争踊りと、性的踊りとある事は當然です。bamboula と通稱する有名なるダンスがある。月明、何物も照し出す夜、町中や城下で此の踊が開始される。男女の踊り手は最初、控へ目に踊つて居るが、タムタムの音、周圍を取り巻く群集の熱狂せる拍手につれて次第に興奮して來る。群集は一層淫



猿な掛け聲をする。ピエール・ロチは『Le Romand'un Spahij』の中に此の踊の様を書いて居る。

「アナマリリス・フォビル」とグリオは筋肉を震はし、身體を揺り、タム／＼を叩きながら叫んだ。すると群集は同じく手を叩きながら「アナマリリス・フォビル」を繰り返した。此の言葉は熱狂的な夢幻境に誘ふ、春の踊りの艶歌の最初の叫び聲である……………。

春のパンプーラ踊には若い青年男女が今日を晴れと着飾つて、踊り狂ふのである。グリオが太鼓を打つと一同はたちまち彼の周囲に集まつて来る。女達は圓形を作つて、思ひの丈の猿歌を歌ふ。最初の一女が中央に進み出て舞ふ。圓は廣がり、太鼓は再び鳴り渡る。女は踊る。硝子玉の飾りの音高く舞ふ。始めは靜かに、だん／＼思ひ切つた放縱な動作を加へて行く。やがて、女は眞黒な皮膚から、瀧と流るゝ汗の爲にすっかり疲れて、ぐつたりとなると、仲間のものが助けてのく。今度は第二番の女が踊る……………かくして彼等は最後の一人まで踊り抜くのである。

「アナマリリス・フォビル」の踊は戀に狂ふ家鴨の踊と云へやう。踊手は巨大な印度家鴨の状態を模する。を栓抜きの様に取り扱ふ。女の方では身體の下部を

したり隠したり、あらゆる身體の運動によつて男の目を引く。踊り子が年増女であれば一層猛烈に淫猥な言葉を發して狂態を演じる。

ロチは更に云つて居る。

年増女は一層破廉恥に猛烈な様をする。屢々彼女達は子供を負つて踊るが、子供は苦しさ悲鳴をあげても、母性の愛を失つて居る女達は猶も構はず踊り続けるのであつた。…

Kassoukés や Sarrakholais 族も性的ダンスを持つて居る。が、ヨロフのダンスより際立つてエロチックでもない。リオ・ニユネの Landounans 達はアラビヤの腹踊りによく似た舞踊を所有する。踊は只一人の女によつてなされ、其の身振りは前後左右に腹を揺すつて、恰も女が正常のを行ふ時の動作をするのである。丁度ハワイのフラ／＼ダンスの如きものであらう。



筆を進めて大洋州の諸島へ渡らう。

五

Canaque 人の間にはブルー・ブルーと稱するダンスがある。一ツは戦争ダンスで此の方は用がないから省略するとしても、一ツは例のエロチック・ダンスである。

此の踊りは愛の戯れとして著明なもので、女子許り男交へずに行はれる。男子の作る圓の中に、同心圓を作つて女が踊る。足を地に密着させて、静かなリズムで、彼女達の尻を非常に軽捷な動作で、前後に揺する。そのリズムミカルな運動が時々淫猥な跳躍によつて中断される。これは女子が　　になす身振りである。周囲の男達は飛び上り、跳ね上り、

ネオ・カレドリアンの間に行はれるダンスは矢張り性交を表象して居る。男達は熱狂して飛んだり跳ねたりして　　の動作をする。女達は其の間　　さして益々男の慾火を煽りつけるのである。

タヒチ……ゴーガンの名畫によつて有名な熱帯性の女性のタヒチ、此處にもダンス、

エロチックのあるのは不思議はあるまい。月の清い夜、ウバ・ウバ踊が始まる。

普通お祭の夜が来て、楽しい祭が終ると、ウバ・ウバ踊が開始されるのである。月の女神ヒナの銀色の光が空一杯に漲り、星が金剛石の様に輝き渡る。緑陰が黒く草原にしみ込む所に男女の踊り手は羞恥を知らぬ者に化して仕舞ふ。

最一度ロチの麗筆を借りて此のダンスを描寫しやう。

「毎夜眩暈を感じる様なものだ。陽が落ちると、タヒチ人達は堤を破つた川の様が集まつて来る。急調子のタム〜の音がウバ・ウバ踊の時を知らせる。さばき髪で、腰には一寸したモスリンの布をつけた丈の男女が此の音を聞きつけて雲集する。そして此の物凄き淫猥ダンスは明け方まで続くのである。

彼等はタム〜に合せて夢中になつて手拍子を打ち腹一杯に歌ひ散らす。女達は皆一ツの状態を行ふ。足拍子と音楽とは最初は寛るやかな調子だが、すぐに急速になつて無我無中になるまでテンポを早める。不意に太鼓の大きな音がする時、女達は惑溺の底に陥入つ



て仕舞ふのだ。

奏

Pomotouの娘達も他の一群を形づくり、より以上の野蠻さを發揮して、タヒチの女達に拮抗する。曼陀羅華の花冠をつけた女達は狂氣の如く猛烈極まるダンスをやる……」

「食後數人のタヒチ娘は薔薇の冠を戴いて、軟い綠草の上に、圓を作つて東洋風に坐つた一人の娘は手風琴を持つて居た。吾々はウバ・ウバに参加するのだ。淫猥な歌に伴ふ踊はオリヂナルな表現と、力強い効果とを持つて居た。手風琴が最初の節を奏で出すやいなや歌の聲は聞えて來た。生き／＼と早い調子で。此の時踊り子の目は光に満ちて輝き渡る。頭は軽く傾いて後ろに向け、胴は其のまゝ動揺する。肱は身體と打ち合ひ、下肢はリズムにつれて上り又下る。かくして踊り子達は吾々の面前に現はれたのだ。

やがて彼女達が圓を解いて、踊を止めた時、女は不意に冷靜になつて仕舞つた。全くそれが同一の女であつたと云ふ事は誰でも信じられない様に。其の中の一人の娘はすつかり侮蔑し切つた様で私の側へ來て云つた。それは聞き返す事を許さぬ様な態度であつた。

「フランス人、ビールをお呉れ」

一體此の島の女は野獸の様なものだ。而も浮氣はやめ度くなる程チャーミングな野獸である。私は時を失せず瓶を取り上げた。女達はラムとビールの満された盃を貪り呑んだ。酒を呑んでは休みなく、又歌と踊を続ける。

女達の興奮は極點に達した。椰子樹の庭に、丈なす黒髪にバラの冠を戴く美しき女達がニムフの如く群れて、心ゆくばかり愛慾の戯れをなす……

然し今や此の場所を去る可き時間になつて仕舞つた。私はこの忘れがたき追想をいつまでも／＼持ち續けて居たいと思ふ」

此の位の所で小生も惜しき筆を置く事にしやう。だが文豪ロチの想出は勿論こちらの胸にもピンと來る。夢の如き熱帯の月下、綠草の上に踊る熱情の女達……コスモポリタンの旅行癖をいやが上に、そつて止まない魅惑が澤山に々々々あるのは、氣のもめる次第である。



小をの 小をの  
野が 野が  
聲またぐら 憲はなげ  
嘘うそ 誑うそ  
字じ 字じ  
盡つくし 盡つくし





右の二書は小野篁歌字盡をもちつたもので前者は三馬の戯作。後者は國貞らしい。二書とも仲々作者の頭が働いた面白いもので一寸珍だと思ふから御覽に入れて見やう。

先づ前者。

中本で外題は紙外小野篁字盡。文化三年丙寅正月、本所相生町一丁目紙屋利助板とある枚數三十八丁だから相當のものだ。所で面白いのは巻頭の第一頁に、次の様な斷り書がある。如何にも當時の讀書階級の有様を物語つて居る。

「此本何方様御用に相成るとも又がしの先きくさままで御評判被下置(不明)むだ書の  
あらくちを御ゆるし被下紙くすかごへ御入れなされる事御用捨奉願上候也。

此ぬし さんば」

總目として、

一、客人の宮跡の祭の圖。一、通神の緣起并祭の行列。一、むな算用早割の法。一、利助の事。一、銀つかひ早割。一、けんえつの割。一、額かんばんの書法。一、色紙短冊扇



認様。一、繪馬并聯の見立。二、年中通用文章。一、諸家紋張。一、篆書似た字盡。  
 一、無禮ぶしつけ形。一、將棊指方並詰物。一、小野篁の小傳並圖。一、兎角迷ふはいろ  
 はの來由。一、新製いろは文字。一、篇冠構字盡。一、五性名頭字盡。一、異類異名盡  
 一、妄書かなつかひ。一、手の筋早見。一、人相小かゞみ并圖論。一、面部圖并註解。  
 一、諸流小うたひ。○頭書目錄 ○かまど詞大概 ○無性印判盡 ○五性書判 ○難字  
 つくし ○まくらことば ○流行とぐり詞 ○痕紋圖說 ○人相圖論 ○平生よくいふ  
 詞○能の面圖 ○月の異名

以上の珍案妙趣、三馬ならではと思はれるいゝ所がある。ニツ三ツ御目にかけてやう。

○胸算用早割の法

いも<sup>いも</sup>芋が五引

なすのしぎやき<sup>しぎやき</sup>四<sup>し</sup>ぎ八<sup>は</sup>き

だんご<sup>だんご</sup>二<sup>に</sup>ほんが八文 ▲團子が五ひいてくしのこる

でんがく<sup>でんがく</sup>三五でんがくの二

土手でだんごを食つた事は云はずに、中の町で初茄子の鳴焼を見れば、モウ茄子もおい  
 らは飽きた。おいで狐から眞崎ででんがくと洒落たから腹がいゝなどゝ、ほらをふく。

一寸顔を出してすぐに歸らうといふ所へ、たいこや藝者がどろ／＼とおしかけると、胸  
 算用がぐはらりと狂つてかけ引がむづかしくなり引くに引かれぬ時は、

二てうつゞみの一組かけてやり、五町にわりて三弦の三の糸をかける。

たいこ持ち二二頓作で洒落る。げいしや。とてちんがちんつ。三一さみせんの糸とひく  
 一ト二が二あがり。いたい引いて甚九をどる。

茶屋ばかりのメ高六十目となる。二人の割合さつと金二百疋のいたごと、おらア一丁  
 目へ行かうハさ、二丁目へあゆばつしと兩方つき合をしらず、こゝで友だちが割れる也。







人ありしが、或る時竹林の下に一人の童子立居たり。凡ならぬ者よと思ひの外屁を放る音ほんと鳴りければ、ぼんならぬにあらす扱はぼん鳴る童子ならんと家に養ひけるが、元來藪の中にて屁を放ししゆる彌治郎とぞ名付けり。譚子盡は是より初まる。いはれにて彼古語にいへるうそつき彌治郎やぶの中で屁を撒たとは此事也。後ますく嘘つきに妙を得て小野篁となのり此譚子盡を製作ありしとかや。



さて大分道草を食つたから、愈々虚字盡の本题に這入らう。

春うはき、夏はげんきで、秋ふさぎ、冬はいんきで、暮はまごつき。

金へんにやりてにこく、婆はほまち、母はへそくり、娘ふきりやう。

大門をうつ大盡に、きつて札。女ごたく居るはまちぶせ。

鋤

銚

鉄

鐮

竊

窺

竊

穴なしは小町、穴知きいたふう、へその下や穴いなり也。





一厚。二威。三清。四古。五孤。六薄。七惡。八俗と云。是を八八相とするなり。男女ともに此大概をもつてしるべし。いにしへ重忠のさとりに四相なり。義經又先をくゞつて八相をしる故是を世に義經八相とびといふ也。こゝに出せる圖。又四相を増考へて十二相をあらはす。ナント四相

鯀ウツク

鯨ウツク

鯨ウツク

女房の角はやきもち、おさまらぬ角突合に細工てれつく。

鴛ウツク

馬ウツク

一びきに三人のりはくはうじんよ、馬三疋が三馬式亭。

等々數多あり。

▽異類異名盡

此の中に素敵な傑作がある。

七

(上江傳七)

十

(堅横十太)

円

(横江傳丹)

口

(田口十内)

▽人相圖論





お  
ばかにした事にあらず  
や。

三馬の洒落は先づこの  
位で打ち切り、次は小野  
盤龍字畫にかゝらう。  
實を云ふと此の本所謂末  
期の赤本で、大つ平でお  
座に出せる代物ならず。  
と云ふのは出来が悪くて  
はなく純粹の猥だから  
である。然し趣向もよし  
繪もよし、此の種赤本中



の傑作であらうから  
掟に觸れぬ程度の紹  
介を試みやう。(一)  
形は中本形。赤本  
にしては摺も色も線  
も上出来なり。國貞  
らしい。上段三分の  
二の場所に例の畫が  
あり下段三分の一の  
所に文句がある。畫  
は勿論説明の限りで  
はなし。







アラビヤ錬金術の特徴  
(中世紀初期)





アラビヤ人の錬金術に関する幾多の論文が傳つて居るが、それ等はビザンチンのそれの如く、主として架空的神秘主義や、臆朧主義或は古代ギリシヤの錬金術士達の天文学と魔法との混合物の様なものであつた。

「アルハビブ書」の中には賢者達は悪魔の怒りを怖れて金属變質の秘法を漏らしてならぬと述べて居る。

「オスタネス書」の中には學者の石の八十四通りの名稱、七ツの扉の架空的な夢、ヘルシヤ賢人に關するエチプト語の三ツの題名、白象の尿の治療的効驗に關する印度賢人の引用文等がある。

チーバーの「リケ・ウエイツ書」には、賢人は動物、植物、礦物等の四元素の混合を、占星學其他種々のしるしに依つて見分ける事が出来ると書いて居る。

彼の「同感の書 (Book of Sympathy)」は錬金術の秘論として、七ツの遊星の大切な事、及び物質中の精靈について多くの事を記してゐる。



『Book on Quick-silver』此の書は内容の明徹を自稱して居る僻に、どれよりも難解で神秘的である。この中には死者を起たせる事、『聖水』の如き液體や、無垢の處女の乳の使用の事が出て居る。

さて本題に這入つて、初期中世紀の *Mappe Clavicula* の中に黄金製作の處方があるから一見しやう。

それは第一に「最良の黄金」を造る秘法で始まつて居る。此の場合の合成物の一ツは、*ギリシヤ*人が「*アフロセリナム*」と稱する一塊の月土 (*Moon-earth*) である。第三の秘法では、最初にその研究中の混合物の少量を、更に充分順序を會得する迄、實驗して見る事をすゝめてゐる。

第六の秘法中には山羊、牡牛の膽汁、ギリシヤ或はアラビヤ産のサフラン、これ等を土用の日にチーベの乳鉢で搗き碎く様に書いてある。

秘法第十四の終りに於て、その中には牡牛の膽汁も亦含まれて居るが、鍊金術者にとつ

て非常に大切な秘密確守の教訓が一ツ與へられてゐる。即ち「何人にも相傳を許さざる秘法なり。何人にも豫言す可らず」

秘法第二十の中には、鍊金術は宗教的聖術であつて、此の術の爲には、あらゆる仕事を犠牲にす可き事が述べてある。同じく此の項に、黄金は鐵鏽、磁鐵、他國の明礬、液藥、金、葡萄酒の混合物から作られると書いて居る。

秘法第四十一に曰、金は物を書く爲に熔解する事が出来る。それにはガラスの容器に金を入れ、周圍を石炭で圍んで、印度龍 (*an Indian dragon*) の血の中に浸す。

第六十九では、龍或は孔雀の血と小便、セリドニ石 (燕の餌袋中に發見され治療力を有する寶石) と混合する。第六十八及第二百二十八に於ては牡牛の膽汁、豚の血が使用される

テオヒラス (*Theophilus*) は種々の卑金屬を黄金に變ずる事が出来ると信じて居た。鍊金術士達は熟練した手際で、例のバジリツクと云ふ鶏の化物を製作する。それには、先づごく小さな二ツの窓がある、石の壁の地下室を作る。そして其の中へ十二歳或は十五歳の





△

鶏を二羽入れて澤山餌を與へる。

二羽の鶏は肥え太つてから交尾して産卵する。

卵が生まれるとすぐに雄鶏は逐ひ出され、ひねる蟾を入れて卵を抱かせ、パンの餌を與へる。

卵が孵化すると、若い雄鶏の様な雛が出て来るが七日間たつと、蛇の尾が生じて、若しも地下室が石で舗かれてなかつたら、直に地下へもぐり込む位になる。術士は眞鍮製の大きな丸い容器を取り出し、其の中へ

入れて銅の蓋をかぶせ、地中に埋める。

器中の化物は六ヶ月間、微妙な土によつて養はれる。此の時期が過ぎた時、強い火にかけて焼き殺し、すつかり冷えてから取り出して丁寧に粉末となし、血色のいゝ男の乾して粉末になつて居る第三部分の血液を加へる。この混合物を清潔な器中に入れ、強醋で強め非常に薄い純粹の銅板の両面に塗り、火にかけ白熱してから取り出して、冷却させ又例の液で洗ふ。この操作をくり返し、遂にその液が銅板に滲透し、黄金の重量と色彩を得る迄続ける。かくして銅から黄金を製するのである。

△



秘  
具  
論  
(張形考)





## (一) 總 說

普通張形と云ふ物は、其の發明されてより以來今日に至るまで、常に二ツの使用法を持つて居る。

- 一、生殖器崇拜の神體として祭祀する。
- 二、機械的自慰用の道具とする。

此の二ツの使用法は不離不測のものであつて、張形なるものを單に自慰の機械として論じた文では、未だ十分でないと思ふ。

抑々 (Prattis) 張形即ち生殖器模型が人類によつて製作された起原を確言する事は不可能であるが、恐らく原始人の無器用手が多少とも造形上の技量を習得した時、まづ作り上げたものが幼稚な男女生殖器の模型ではなかつたであらうか？

原始人は男女の生殖器を結合さす事によつて、肉體上の快樂と、子供の生ずる事を知



つた。これは彼等にとつて絶大の不思議であると共に、喜悅であつたに違ひない。彼等の社會にあつて多産は決して不安なものでない。無限の土地の上に自分の分身が増加する事は喜である。且つ強暴な野獸、酷烈な氣候と戦はねばならぬ彼等にとつて自分達の種族を一人でも増す事は、喜と云ふよりもむしろ必要であつた。其の上獸的體質を有して居た原人女子の分娩は極めて容易であつたと信じられる。かくの如く生活難の脅威も、分娩の苦痛も、殆ど感じなかつた時代に於て、彼等が多産を希望した事は當然の歸結である。

即ち多産の祈願が彼等の單純なる頭腦に創造した造物主の表章たる生殖器を神化して崇拜する形式となつて出現したと考へるのは見易い道理である。

か様に於て、男女生殖器の模型は、彼等の崇拜する造物主の偶像として發明製作され、且つ熱心に祭祀されたもので、張形なる物の最初に世に出た動機は、敬虔なる宗教上の目的にあつたと信じられる。

然らば其の宗教上の目的たる張形が、いつの時代より自慰の機械として用ゐられ初めた

かを考察するに、これ又甚だ漠然として居て斷定的年代を決定する事は不可能である。然し私達はも一度原始人の幼稚な張形時代を掘り返して見やう。

譬ば彼等原始人の男子の一隊が遠征又は狩獵に出發した場合、夜營の徒然なるまゝに、木や土で生殖器の模型を作つて女性との關係を空想して慾情を慰める、或は部落に残つた女子達が、男根形の模型を以て、遠征の男子を想ふ、斯うした場面を空想するのは、多少小説的であり過ぎると云ふ非難はあるかもしれぬが、全然有り得べからざる事とも思へな

して見れば生殖器模型なるものが機械的自慰の道具として用ゐられた濫觴は、これ亦原始人時代に初まつて居るとも想像出来るのである。

元來古代女性間に於て、男根模型が崇拜された主要な目的は、前にも述べた多産の祈願に外ならぬ。彼女達が男根模型と交接するのは單に自慰の快樂を得んが爲のみではない。偶像化された造物主である此の模型と交接する事によつて容易にして饒多なる妊娠を得ん



と願つたのである。かの印度人間に信じられて居る、處女のまゝで死ぬ時は極樂へ成佛する事を許されない。それが爲に夫と第一回の交接をしない前に寡婦となつた少女は男根神即ちリンガムによつて破瓜を行ふと云ふ思想は、女子の本分たる妊娠を重大視して、此の妊娠に對する必然的附隨行爲としての交接を行はしめて、不幸なる處女に一人前の女子たる資格を與へると云ふのに外ならない。猶結婚前に死亡した少女に對しては父兄達が自ら穢多非人等を雇つて其の少女の死體の破瓜を行はせ、然る後初めて埋葬すると云はれて居る。之を見ても如何に彼等が子を産む事を以て女子の第一義務として居るかよく解る。

斯うして神聖な宗教的祈願によつて、女達は男根模型を使用した。然しながら、此處に注意すべきは彼女達が妊娠を祈る時に當つて單に男根像を拜む丈ではなく、實際にそれを行つた事實である。男根模型を自分達の

神聖なる宗教的祈願であるとは云へ、器具の摩擦より來る肉體的快樂は到底否定し得ない所である。即ち彼女達の宗教的祈願には、優れたる肉體的快樂の伴ふ事を發見したのであ

る。此處に於て宗教上の生殖器崇拜は、肉慾本能満足の自慰的動作と不離の關係を結んだと見なされる。古代印度、埃及人達が團體としては巨大な陰陽神を祭祀し、個人としては實物大の金石木材石膏牙製の生殖器模型を常に身邊に携帯して居るのは明かに彼女達がそれを以て妊娠祈願と同時に自慰の用に供した事を觀取されるではないか。

ギリシヤ、ローマの性慾神パン神やプリアプス神の立像の

を行

ふ儀式は誰でも知る所であるが、これを主題とせる繪畫彫刻などは殆んど本來の宗教的意義を忘却して、これ等神像を抱擁する女子はいづれも破瓜の儀式と云はんよりはむしろ自慰的快感によつて恍惚たる様に製作されて居る。次の様な畫がある。

森の中に安置したパン神の立像に一人の

て今しもエクスタシーの恍惚境

に遊んで居る。すると、一人の 二人の下半身を幕で隠してやりながら微笑を含み、口に指を當て、沈黙を示して居る。これが果して單純なる破瓜の儀式を現はした畫であらうか？



猶皮肉な畫は、二人の男女が公園を散歩して居る時、男がフト樹間に立つパン神の像を見付け、周章て、自分の帽子をパン神の にかぶせて居る圖である。こゝに至つては最早やパン神の 是宗教的存在ではなく立派な催情的自慰の道具になり下つて居る。

かくの如く古代に於ける張形使用法は宗教上の崇拜と自慰的使用との二ツが不規則に混合された物と見るが妥當と信するが、古代ギリシヤのレスボスの婦人は象牙又は黄金製張形を用ゐたと傳へられ、『グロテスク』第二號拙文「レスビエンヌ」参照）又アリストフアネスに依てミレジア婦人が「オリスボス」なる革製の張形を使用したと云はれて居る所を見れば随分昔から専門的張形が存在して居た證據とも云へやう。（此の「オリスボス」を使用して居る古ギリシヤ花瓶の畫は佐藤氏の性慾語彙に載せてある）猶ヒロングスの傑作「秘語」の中には「オリスボス」を使用した二人の貴婦人の對話が出て居るが、其の中の一人はこれを「樂みの夢」と云つて居る。

舊約のエゼキエル書（十六章十七節）に「汝はわが汝にあたへし金銀の飾の品を取り、

男の像を造りて、これと姦淫をおこなひ云々」とあるのは金属製の を作つて自慰の用に供したと見る可きであらう。

これ等の物は勿論専門的自慰用の張形として認む可き物ではあるが、まだ多少宗教的臭味が含まぬでもない。然るに一度び目を印度の古文献に轉すれば例のカーマ・ストラによつて私達は完全に宗教と分離した張形に接する事が出来る。其を左に列記して見やう。

▲これら（ 模擬品）は金、銀、銅、鐵、象牙若くは角にて製する。

▲パーブラヴィーヤは錫、若くは鉛にて製したるものを主張する。それは緻密で、冷かで、性慾を興奮し易く、 して女の快感を惹起するものである。

▲グーツチャーヤナはこれを の形に似せて木で作ることを推奨する。

▲これには指環状の一片が附いてゐて、その孔は恰も を通するやうになつてゐる。

外面は幾分粗く、多くの粒状物を作る。（これでするに都合よく

なつてゐる。）この指環状の部分は を緊く保持して硬固状態になすためである。



- ▲かゝる部分を二個有するものはサングハーティーと云ふ。
- ▲三個以上これを附加して　の全長に及ぶものをチユードカと云ふ。
- ▲若し鉛などにて作り全長が蔓草の如く　を撚り回れるものをエーカチユードカと云ふ。
- ▲同じ材料が用ゐられ、而してそれで臺尻状の物若くは一方を開放した網が作られる。而して　の太さ長さに相當する入口の兩側に孔がある。それに附着して大なる粗き表面を有する男子の　の形のものがある。　の全部は　と共に恰うどこの中に入れられる。兩側にある孔に紐などを通じてこの品物は男子の腰部に結び付けられ、かくて男子は動作する。
- ▲かゝる品物なき場合にはアラブー（葫蘆の類）若くはヴェーヌ（竹）が用ゐらる。これらには眞の　の色と接觸を感じしめるやうに油若くは其他の液を塗る。これらは前記の品物のやうに男子の腰部に結び付けられる。或はアーマラカのカーシユトハマ

イラー（多くの木製の珠に石を混ぜたもの）を絲に貫き　の回りに撚られてある。以上アパドラヴァヨーガ、　模擬品を（　に通すことなしに）用ふる方法終る。次には　に孔を開け、其の傷口は藥液で洗滌して孔を固定し、其の孔を通じて左の如き　模擬品を結びつける。

▼　模擬品（孔を通じて結びつけるもの）の形に種々あり。

- (一) ヴリツタム（圓きもの）
- (二) エーカトー、ヴリツタム（一側が圓く、他の側は凹んでゐるもの）
- (三) ウドウークハラカム（木製の白のやうなもの）
- (四) クスマカム（花の如きもの）
- (五) カンタキタム（尖れるもの）
- (六) カンカーストヒ（蒼鷺の骨、或はカンカを標果の一種と見てマンゴの種の形をなせるものと見るべきか）



- (七) ガジヤ、ブラハリカム(象の鼻)  
 (八) アシユタマンダリカム(八日の月の曲りの形をなせるもの)  
 (九) プフラマカム(小兒の獨樂の形せるもの)  
 (一〇) シユリンガータカム(山の頂の形せるもの)

尙ほ男女の嗜好に随つて力強い動作に堪ゆるもの、粗なるもの、緻密なるものなどあるであらう。

以上の張形を一見するに、どれもこれも實際の に嵌め或は着せて動作するものであつて後世の如き女子が自分獨りで慰む様には出来て居ない。それで張形なるものを自慰の道具であると狭く解釋すれば、これ等ゾーツチャーヤナの擧げたものは純然たる張形とは云へなくなる。然しそんな事を云ひ出したら日本の鑑形とか甲形、りんの輪、なまこの輪などと云ふ代物も張形とは云へぬ理窟になるから、矢張りこれ等のものも秘具を代表した名稱としての張形の中へ入れて置くのが穩當であらう。

尤もカーマ・スートラには後宮の女子同志の間に自慰用の張形を使用して僅に快をやつた叙述はある。第五品他妻親近篇、第六章後宮の婦人とその保護。

▼後宮の婦人は守護嚴重なるからに(他の)男を見る機会がない。唯一人の共通な夫を有するのみで常に性交の満足をしなす。さればこれら女たちは相互動作によつて快樂を感ずる。

▼乳姉妹、友だち侍女などを男装せしめ、それ等に 用ゐさせ以て性慾を満足する。 に造つた木根果實など

併て、此處に注目すべき事實がある。それはカーマ・スートラ以外の代表的東洋夢の聖典、アナンガ・ランガ、匂へる園、エル・クタブ等の奥義篇に、張形の記載が無い事である、其の辭、女子の快感を永續せしむる爲に、 を強大にする處方は遺憾なく教へられてある。して見ると、これ等東洋の諸賢者は男女が正常に 場合には、あらゆる方法を教へて其の快樂を助長せしめ、以て神聖なる生殖作用を祝福したが、不自然の方法



を公に教へる事は避けたものと思はれる。勿論私は此の一事實をもつて其の當時自慰の張形が存在しなかつたなどと云ふ大膽な結論をするつもりはないが、少くとも彼等の聖典の作者が性愛を説くに當つて如何に正常にして勇敢、且つ眞剣な態度を持して居たかと云ふ事は推定出来ると思ふ。前述の十數種の張形を記載したカーマ・スートラに於てもそれが男女正常なる交媾の場合にのみ役立ち女子獨りの自慰の具としては使用不可能である點を見ても、私の説は裏書されるであらう。

然し聖典は聖典として置き、普通自慰用の普遍存在して居た事も争はれぬ事實で、スルタンの「土耳其醫藥誌」には此の具がコンスタンチノーブルで公賣されて居た事、バナナ胡瓜が愛用された事を記して居る。オマール・ハルビーの名著エル・クタイプの中で土耳其婦人の同性愛の流行を否定した所に、

「然し親愛なる友達同志、孤獨の女達、若い寡婦の間には例外として同性愛的行爲が行はれ、どちらか一人が腰に張形を結びつけて、戀人或は良人の代理をするのである」

と出て居る。即ちこれ等は完全に宗教的生殖器崇拜の爲に

する張形使用法か

ら分離して自慰の爲にのみそれを使用した明瞭な例證である。

西洋に於ても中世紀になると、張形の二ツの使用法は益々其の區別を明かにして來た。勿論宗教的祈願として魔除け、妊娠、安産、破瓜等には相變らずしきりに用ゐられたが、自慰的専門用具としての發達には素晴らしい物があつた。中世紀キリスト教の尼達は斯うした舞臺に踊る絶好の主役であつた。尼が張形を用ゐて居る艶畫は無數に發見される。パロス。ローランドソン等は好んで此の畫題を取り扱つた。然し此處に注意すべき事は、歐米の繪畫に現はれる張形は殆んど例外なく を持つ事で此の點日本の物とは非常な相違がある。日本の張形で らしき物を持つのは生殖神として崇拜する粗末な製品に限られ、實際自慰の用に供せられる優良品には絶対に の物はない、猶張形に を付ける事も西洋物の特徴で日本製には見ぬ事である。十九世紀時代盛に使用された革製の張形の中には完全なる を持つた實物をつくりのものがあつた。



か様に尼達によつて張形が愛用される事は教會監督者の堪へられぬ所であつて、十二世紀のウォルムスの大僧正ブルシャードは酷く陽形使用を非難して居る。キリスト教會の婦人達が如何に好んで男根形を所持したかと云ふ事は次の奇妙な話によつて、證明されやうかつて、カプシン派の僧侶が、ゼズイット派が其教区内の婦人達に男根形の護符を持つ事を許して居るのは不都合だと非難した事がある。するとゼズイット派では、この事は古來よりの習慣だから改正する必要はないと頑張つた。それで到頭法皇の前へ事件が持ち出されると、流石の法皇もこの裁きには閉口して、熟考の揚句ゼズイット派の婦人が持つて居る男根形に小さな十字形を附け加へよと云ふ珍判決を下したのである。

それから十五世紀以降になると張形は益々一般に流行して其の文献等も精細を極めたものになつて居る。十六世紀にはイタリーの小説家フォルティンの「初心者物語」の中に尼僧、寡婦或は妊娠を欲しない女子が愛用した玻璃製の道具の事が書いてある。

コツプ付き玻璃製の張形の立派な標本は、フックス氏の書いた風俗史の中に精巧な寫眞

版となつて載せられてある。

エリザベス朝の英國に於ても同様な道具があつたと見えて、マルストンは「諷語」の中でルシアといふ女をして夫の生温い寢床よりはガラス製の道具の方がよいと云はせて居る十六世紀のフランスに於てもガラス製のものがあつた。プラントームの小説の中にも、其の事が書いてあつた様に記憶する。十八世紀のドイツでは其れを (Samthause) と稱し、フランスでは (Godemichie) と呼んで居た。

一七八六年に發行された有名な好色小説 *Le Rideau Levé ou l'Education de Laure* (ニール嬢の教育) —— 此の小説は通常大政治家オクターブ、ミラボの戯作と稱せられて居るが、實際はマルキー・ド・サンチリーと云ふ男が書いたのである —— の中に左の如く詳細な張形の描寫がある。

「其の道具は總ての點に於て眞に逼つて居るが、只摩擦を増す爲に頭より根元まで横に波線を刻んであるのが實物と異ふ點である。銀製で、其の上に滑かなワニスを塗り、實



物の色を模して居る。中空で薄く、且つ軽い。内部にはピストン仕掛のある銀管を通じ、其の尖端は道具の 〆 に開いて居る。内壁と銀管との間には温湯を満し、銀管中に淡白色の溶液を入れて置き、 〆 の役をなさしめる」

當時の英國でもチルド (Dildo) の使用は普遍的でアーケムホルツによれば、巴里に於ては秘密に賣買されて居たが、ロンドンではフリッツプスと云ふ夫人がライセンスター、スケアに店を開き公然と賣つて居たさうである。

一八三五年にジョン・ビーは此の道具の名前は、元はチルドル (Dildol) であつたので以前はもつと廣く用ゐられて居たと書いて居る。

十八世紀のフランスでは最も著名な青樓主マダム・グールダンが (Consolateur) —— 即ち慰むる物 —— の大販賣をやつて居たが、其の死後調べて見たら、諸方の尼達からの注文が無数に來て居たと云ふ事である。

ガルニエの (Onanisme Seal et deix) の機械的手淫の條下に、巴里に於て秘密に賣

られて居る精巧なゴム製の張形の事が記されてある。それは牛乳或は其の他の液體を内部に貯へ、遂情の刹那 〆 を押して射出する仕掛であるとの事である。猶同氏は支那のキャンドンでも朱色ゴム製の張形が製造され天津で公然販賣され、其の他

アルバムも同時に賣られて居る事、それから張形使ひの見世物の事なども書いて居る。

東印度諸島の地理的中心なるボルネオは張形に於ても亦其の中心地の觀があつて、アム balan、balan、カムピオン等種々の名稱を有する張形は長さ約二吋、兩端を丸めたる骨又は金屬製のもので主としてボルネオのキャン人及ツヤク人間に用ゐられる。

彼等は 〆 に孔を穿つて、その傷口に栓をつめて置き、

此の孔へ色々な

道具を通して摩擦を助長せしめると云ふが、これは二千年前に印度に於て既に行はれて居た遺風が傳播したものであらうか？ 尙ほツヤク人は棕櫚の纖維で作つた襲のある環 (balan、anas と稱す) を日本のなまここの輪の様用ゐる。瓜哇では山羊の毛皮を 〆 へ巻くと云



ふ。ロシアでは小さき齒を植えた弾力性の環を用ふる事が普遍されて居るさうである。南米アルゼンチンのアラウカニア人は馬の毛で作つた小さきブラッシュを に付けこれをゲスケルスと云つて居る。

アフリカ内地ではマデイゴと稱する木製の張形を用ゐる根部に のものがあつてダラクと云ふ木の汁を満たしてある。此標本はベルリン市立民族博物館に所蔵され、其の寫眞はダス・ワイプに所載されて居る。ルネ・マランの有名なる黒人小説「バツアラ」の第五章には現在でもアフリカ内地の女達が張形を一種の財産、護符、裝飾等の爲に所有して居る様子が描寫されてゐる。それは酋長バツアラの妻が をぶら下げて男の役を演じつゝ相手の女と踊る場面があるが、この際の張形は明かに猥褻な意味に用ゐられて居る様に思はれる。

次に支那の事を考へると、今より二千年前既に印度と共に大性慾學を大成して居る國であるとして見れば、性愛の奥義篇とも云ふべき秘具、秘藥、秘法等は無數に文献上發見さ

れねばならぬ筈であるのに、秘藥、秘法の事はさて置き、秘具即ち張形に至つては仲々目につかない。性慾教科書として有名な、素女經、玉房秘訣、洞玄子、玉房指要等の古文献に張形の記載があるか？ 原本を引つくり返して見ても、その事は一行も書いてない。黄素妙論以下の諸書を見ても秘藥の處方は必ず所載されてあるが、精細なる張形の報告は見當ならぬ様に思ふ。斯うした眞面目な性慾學の研究書に記載されてない張形は往々にして普通の淫書の中に發見される。『京本通俗小説二十一』此の小説は金瓶梅よりも古いものであるが篇中春藥秘具の事が明かに出て居る。

海陵王の第一の寵妃阿里虎が、王に棄てられて性慾の過剰に苦しんで居る時、牙觸器なるものを得て之を勝哥と云ふ女につけさせて試みたと云ふ所がある。原文は

厮兒有勝哥者身體雄壯若男子給侍阿里虎本位見阿里虎憂愁抱病夜不成眠知其慾心熾也乃托宮豎市牙觸器一具以進阿里虎使勝哥試之情若不足與更有餘嗣是與之同臥起日夕不須臾離。牙觸器は明らかに張形の事である(『グロテス』第三號混沌庵「京本通俗小説」解題參



照)

杏花天には角先生なる文字があり、金瓶梅には銀托子(銀製の環、の根元に嵌める) 其の他の諸淫書からは相思套(日本の鍔形の類か) 硫黄圈(硫黄にて作れる環、の頸部に嵌める) 白綾帯子(淫薬を塗れる絹紐、日本の「ひとすいき」の如く用ふ) 懸玉環、勉鈴(りんの玉)等を、和譯の如意君傳からは偽、偽を有する精巧なる張形の記載されたのを見出し得るが、残念な事には、それ等の精確な標本圖、及び形態の説明が缺けて居る爲に、甚だ隔靴搔痒の遺憾に堪へない。然し多種類の優秀な張形が存在したのであらうと云ふ點は想像し得る事で、左に引用した覺悟禪の一節も其の間の消息を物語つて居ると見る事が出来やう。原本の第十七回目、未央生と後家さんの花辰とが色情問答をする所である。

花「看<sub>ニ</sub>春意<sub>一</sub>。誦<sub>ニ</sub>淫書<sub>一</sub>。听<sub>ニ</sub>騒聲<sub>一</sub>」

未「春意を看、淫書を誦するのは僕も初婚當時、大にやつたものですが、それは一度丈

の薬で、二度三度になれば感興も何もなくなるではありませんか」

花「それはあなたの所には春畫も淫書も少いからですわ、それですぐ見飽いて仕舞ふのでしやう。妾の家の様に澤山あれば順繰に見て居る内に、先のは忘れて、今度見る時はやはり最初の様な感興が涌くのですわ。第一看<sub>ニ</sub>春意<sub>一</sub>誦<sub>ニ</sub>淫書<sub>一</sub>にも、それ〱方法がありますのよ。先づ春畫を見るには、男女がチャンと坐して居て、一枚一枚と見て行きながら悠り其の妙所を味ふ可きで、其の内に

くるもの  
それから替り

ですよ。次に淫書を読むのは、

すると云ふ譯

なのよ」

未「なる程、それで二ツの事は解りましたが第三の騒音を聴くと云ふのは何んの意ですか？」

花「妾は自分がして居る時、すぐ側で誰かの

大好でしてネ、で



妾は腰元に云ひつけて、妾の側で

未「だつて、そんな事をしたら、あなたの御主人は肝心のあなたの番の時、参つてしま  
やあしませんか？」

花「それには妙法があるのよ。勿論腰元と

妾の夫ではなくて代理ですわ」

未「ワハハ、ハ、ハ、解りましたよ。奥様。その男の性は角でしやう！」

以上の話で見ると、色情學の大家花晨後家は明らかに素晴らしい無数の秘畫の所有を確言  
してゐる。この事實から推して彼女が秘畫と同様に種々様々の秘具、秘藥を持って居た事も  
類推される。此の時代の張形は勿論精巧な工藝品であつたに違ひない。

猶「不求人」には張形の事を角先生と云ひ「更豈有此理」には辭々好々先生「啓望南飛」  
の賦がある。好々先生とは張形の事で、望南飛とは吾妻形を指すのであらう。「林蘭香」の  
註に、

京師有朱姓者、豐其軀幹、美其鬚髯、設肆於東安門之衢、而貨春藥焉、其角先生之制尤

爲工妙、聞買之者、或老嫗、或優尼、以錢之多寡、分物之大小、以盒貯錢、置案頭而去  
俟主人措辯、畢即自來取、不必更交一言也、

此の一節は江戸に於ける四ツ目屋、倫敦に於けるミセス、フイリツプスの店、巴里に於け  
るマダム、グールダンの店に對して支那にも立派な秘具秘藥販賣所があつた絶好な證據で  
ある。

朝鮮では現在は殆んど張形なるものは存在しないさうだ。今村蝶炎氏から聞いた話だが  
先年或る所から、多數のかうした秘具が発見されたが、闇から闇へ持つて行かれたとの事  
で吾々には非常に残り多い話であつた。

扱て、これ丈の記事で支那の張形を片づける事の無法千萬なのは私と雖も百も承知して  
ゐる。換言すればまだ私には左の如き根本的研究が残されてゐるのである。

- 一、支那に於ける原始的張形（生殖器崇拜をも含む）の發生時代。
- 二、支那自國に於て、それ等は發明されたものか。



三、或は印度、西藏あたりより輸入されしものか。

四、いつ頃より精巧なる工藝的自慰用の張形が製出される様になつたか。

五、其の形態、種類は如何なるものであるか。

第一の疑問に對しては、確實な文献は不明である。只「畫譚鷄肋」に、

「支那の上古にも、柩の四方に、蛤の殻を瘞み是へ人物を畫き置きしとなり。

古きより漢人の畫きし蛤を掘り出せしこと、略史にも見ゆ、其畫皆春情ありしとぞ」

とある所から考へて、古代支那人も生殖作用に非常な驚異と憧憬とを持つて居た事がうかゞへる。して見れば、其の變形である男根崇拜も當然行はれて居たと思つても間違はあるまいが、確證を持たぬ私は今暫く他日の研究に譲つて置く。

第二、第三、第四、第五とも私はまだ、充分なる文献を發見しない。甚だ汗顔の至りであるが、もう少し時間を貸して戴き度い。然し支那に於ける生殖器崇拜の流行が左程古代よりあつたと思はれぬ。現に唐の名僧三藏法師が入竺した當時印度各地に屹立する大陽物

に驚嘆して

「外道天根を拜す、その高さ百尺」

と、あきれて居る位だから、唐時代にはまだ瞠目する程の男根崇拜は行はれて居なかつたかも知れない。

所で吾々が深く注目すべきは喇嘛教が支那人に與へた影響である。支那人が喇嘛教を信仰した一大原因は、喇嘛僧が不思議の秘藥秘法を持つて居ると信じられて居た點にある。かの淫婦「玉妃」の寵を受けた九王が喇嘛僧より「阿肌藏丸」なる靈藥を得た話は有名なので（此の話は秘藥篇に載す）下亦上にならひ、争つて喇嘛教に歸依し、斯る靈藥を得んとしたのである。か様に靈術に通じた喇嘛僧達が秘藥と相棒である可き秘具の術にも達して居たとは誰でも考へ得る所と思ふが、矢張り確たる文献はない様である。

今一ツ私の不思議とするのは、支那で最も早く現はれた性慾教科書とも云ふ可き道教の中の間丹術でも張形の使用には觸れて居ない。これはどうしたものであらうか？ 私をし



でも一度勝手な想像を許さして貰へれば、支那に於ける諸性慾研究書に秘薬のみの記載があつて秘具の記載まれなるは、元來秘薬なるものは専門的智識を持つて居らねば製造出来ぬもので、民衆は當然賢人達によつて、その製法の教を受けねばならぬのであるが、秘具に至つては、精巧複雑なるものはいざ知らず、通常簡單なる品なれば十歳の童兒でも製作し得る故に、諸賢者達も張形製作法を其の研究書へ載せる煩をはぶいたのかも知れない。大した説でもなささうだが、また當らずと雖も遠からずではあるまいか？

現在の支那には北京今の北平には、四ツ目屋式の家があつて、猶秘具を簡單に賣つて居るさうだが、精巧なものではないらしい、上海には殆んど鼈甲製なんかの立派なものも見當らぬ。例の磨鏡に使用する張形は單なる革製の棒で、中央に鏝もなければ、形態の意匠もない。猶實見した以外に、寫眞による支那女の自慰を見るに、矢張り粗雑なゴム製或は革製のものを使用して居る。これ等から類推して、現在の支那の張形は問題とするに足らぬものと思ふ。

次には自然物を持つて自慰の器具となした話を神話傳説等から二三引用して見やう。布哇の神話にも女神達が其の衣の下に置いたバナナの爲に孕んだといふ事が傳へられ、臺灣生蕃傳説にも次の様な面白い話が殘つて居る。

「或る所に恐しい氣の利かぬ女があつた。社人は「ゴツトツ〜」と云ひ囁し嘲笑してゐた位だが誰一人嬉にならうといふものがない痴かな女にも性の惱みはあつた。寂しさを啣つてはいつも畑に行つて人知れず胡瓜を弄んでは樂しみ、時には玉蜀黍や薯等を使つて獨り慰んでゐたがどうしても十分の満足は得られなかつた。娘は悶々の中に世を早くした(タイヤル族キナツー蕃)或時三人の娘が薯を掘つてゐたが晝休みの時一人の娘が私に薯を削り適宜な型を作つて之を弄してゐた初は何事もなかつたが、やがて中程から折れて取れなくなつたのでしく〜泣き出した。連れの娘は吃驚して尋ねると、今蟹がやつて来てビツビに入つたので痛いのだといふ。一人は早速手探りにその蟹を取り出したが、蟹どころか削りなした薯だつた、餘り馬鹿にしてゐるので頭目に告げたら、娘は謝罪せしめられた(タイヤル族大料峽蕃マリコラン蕃カラバイ蕃、ブマン族千卓萬蕃やはり薯を弄した娘があつた、バイラン族タラカウ社、大體同様だがこゝでは娘が死んだと傳



へてゐる。サイセツト族大陸社は茄子になつてゐる。

サセク族内太魯開蕃、少女が菌を弄んで困つてゐるのを老人が救つてやつた。そして今でも青年が「菌を取つてやらうか」と若い娘をからかふのである。

「昔一人の貧乏な男があつた。妻を娶る資力さへなかつたので、求妻の勸めもすつかり謝つてゐた。そして竊に山に行つて芭蕉の幹に穴を穿ち情慾を洩す事を樂しみとしてゐた。或時社の壯丁が後から来るのも知らずに例の如く獨り佳境に入つてゐた。社人は素知らぬ顔して歸り、細く削り尖げた竹を無數に孔の中に植えて置いた。知らぬが佛の男は翌日芭蕉に通つたが忽ち竹串に刺され命まで落してしまつた。(タイヤル族大料埃蕃)

サイセツト族がラワン社、ヤウエロスボンといふ男が女を誰かさうとしたが、その手に乗らずに逃げてしまつたから、忌々しさのあまり孔のある石をしたが、心適かず芭蕉の幹を削つて片つばしから行つた。後で見ると畑中の芭蕉は悉く刺られてゐた。

バイオン族アツガス社、或男が「ロネー」夕顔に湯を注ぎ軟くしておきそれを愛玩した。

同タラマカウ社、或時娘が外で遊んでゐると、榕樹の根が延びて来て遂に犯してしまつた。

妻のない男は大きな瓢に孔を穿ち湯を注ぎ暖めておいてそれを抱く、殊にゐるんな迷信から妻の

ある男でも自由にならぬ場合はこんな方法を講ずる。

成熟した女が久しく男との語りひをせない時は腰水腹を貫き遂に頓を衝くとて、蕃薯を(ウツタシ)の形に作り温めて弄ぶかうした事を「ビシヨカリジン」——殿戀ひ)といつてゐる。(サセリ族トロッケ蕃)。

楮で、總説を終るに當つて、張形の變態的使用法を一二擧げて見やう。これは生殖器崇拜でもなければ、自慰的道具でもないと言ふ一寸考へつかぬ妙な使用法である。

「津輕の家士畑十兵衛語りけるは奥州海道に金精大神宮とて小社ありて神體の黒銅の陽物を安置崇敬しける其仔細を尋ねければ古老答へて言ふ古此處に一人の長者ありしが獨の娘成長に隨ひ容貌美麗にして風俗絶世なる事類なし父母寵愛斜ならず近隣の少年争ひ妻に乞ひける外に男子なければ他へ出す事ならず筆を撰で入れけるに如何なる事にや婚禮整ひ侍る夜聲は即死亦是逃歸りて父母驚く事大方ならず娘に其譚を問へ共交りに臨みて即死または怖恐れて逃歸りぬこと私も何故といふ事知らずと答へ父母も心ならず逃歸り



し掣に能く咄し合せしが　　に鬼の牙ともいふべきもの有りて或は喰切または疵を蒙りしといふ娘もいぶせき事に思ひけるが或男此事を聞いて我れ掣にならんと望みければ其家柄もよく掣にすべき人も仁たい氣質も能く相談熟し仲人をして彼の　　の事ども申論しければ黒銅にて　　を拵へ婚姻の事聞に入りて交りの折柄銅打のもの　　に入れしに例の通り雲雨に乗じ彼の　　に嚙付きしに何とやら繁く彼の　　にひどき小音せしが暫時ほど置き抜き取りて見れば牙は悉く　　に嚙付きたりと見えて所々に小疵十五六ヶ所あり　　補理ひし時銅をきたひ打ちたるにあらず磨きは能く細工あれどもなまがねにして柔かなれば其小疵何れも深し扱て抜き取りたる跡届くまで探してみれば小さき齒のとがりたるもの數二十本碎き散りて不殘取れりまた翌日も前夜の如く試みるに何事もなく尋常の女と成りし故右黒銅の男根を神に祭り今に崇敬せしとかや」

これと同様の説話は臺灣生蕃傳説、アイヌ傳説からも發見される。

これよりも猶ほ面白い變態使用法は滿洲醫大の長谷川氏の「鎖陰の事」の中に出て居る

話である。

「水府の城石川村、某の娘年齒十六。或日腹部の急痛。田舎の事。とりあへず鍼と灸とで應急の手当、十餘日經て四月の上旬。食後腹へ雖するやうな激しい痛み、やがて囊軒先生のお駕籠が娘の家の門口に下りる。脈浮緊、頭痛、熱發、自汗流るゝが如く、面色赤くして燕脂を抹するに似たり。少腹の急張は前陰及び肛門にまで及ぶ。鼓張は疼痛を伴ひ恰も臨産の狀經水の有無、答へて未だ知らずと言つた。望、問、聞切、の四診もすべて鎖陰の症に偶合する。いよゝ期する處あり、人を拂つて　　果せるかな無孔にして膨脹する事手鞠の如し、だつた。指の腹で按じ撫でて見るに、虚軟にして堅實ならず、處女膜が膈を閉塞してゐるものであるのが判つた。即ち五不女の内第三の「鼓」に相當するものだ。娘十六思春の期、天發すでに流れても出でるに途なく滯停充滿の膨腹と知れた。蘭設篤ランセツドクと稱する披針を以て、上膜縦に割開すれば敗血迸り出る二升あまり腹痛其他の諸症立所に消へる。跡へは、紙を巻て長さ三寸餘、棒の如きを造り、其の上



へ。綿を纏はせて太さ人勢（陰莖）の程となし、中黄（一種の膏藥）を塗て靜かに創口へひねり込み上から丁字帯を施した、數日を経る間膏を塗換へる事數回創口頗に癒へて、剩餘の膜は自ら收縮し陰門の周圍に歸した全癒後七日目の朝、突如月水來潮。量、色、質、及び六日間の日數等、常の婦人と毫も變る所がなかつた。」

「それから序だから書くが、此際治療に使用する張形だが、之を妙齡の婦人に用ゆる場合が多いので、張形と云ふ名稱はどうも面白くないとあり、當時の醫は脹質とか、又春林軒では鎖陰膏具と唱へたが、其品は從來女子自潰の張形を直に用ひた。窺宮のため用ゆるものは、その龜頭に當る部を切斷したもので、本間棗軒はそれを改良して前記のごときを案出し窺宮管と稱した」

自慰用の張形が立派に醫療上に使用された實例恐らく日本獨特の新発見ではあるまいか。

## （二）日本張形考

元來此の稿は、秘藥論と合して、二部で日本性愛與義書となり、筆者の仕事の重要な部分を構成す可きものだが、不幸幾度かのアクションの爲め、原稿を失ふ事數度今では全く記憶によつて纏め上げる事を餘儀なくされて居る。

故に單行本として上梓するには不足なり、と云つて捨て去るには忍びず、所謂鷄肋として此の隨筆の中へ入れた。所論の貧弱は平に御容謝あり度い。

扱て、張形なるものゝ日本に於ける濫觴はもとより不明だが、古書によつて想像すれば「天の御柱」は日本最初の男根形ではあるまいか。須佐之男命が死馬を投げ込んだ時、天衣織女は驚いて梭で陰を突いて死んだ。これも梭を用ひて手淫をして居た時と見えぬ事もあるまい。三輪の大神が丹塗矢となつて愛人の陰を突いた。丹塗矢は勿論張形とも考へられる。

人王三十五代皇極天皇が舒明天皇の崩後、ある夜の夢に、一人の美男來り、

「某は東遠國の者にて御座候、吾は先祖日本武尊、天照太神よりの草薙の御劍を拜受し、



勅宣を蒙り王威に隨はざる輩を誅罰の爲め東國に降り玉ひて、猿田豊根彦が女垣生乙女に假の縁を結び給ふ、乙女孕體となりければ、日本武尊御懷中より玉作りの鐵の男根を取出し、乙女に告げて曰く「汝が腹の子誕生せば是を形身に授けよ」とありて本國に歸り給ふ。其子と生れて金勢の宿彌と名乗り申候」  
愛された。

以上は陸中の卷堀神社の縁起である。(同社は長祿三年——二一九年西紀一四五九年——の建立なり)猶此の卷堀神社については齋藤昌三氏の「性的神の三千年」一五三頁に左の如き記事が出て居る。

「卷堀村左のかた檜の大木八本あり其所の民家に惣七金勢神を祭る。此神いつの頃より祀れるといふ事を知らず、神體は唐金を以て作れる男根にて土俗傳へていふ此村の少女十三四歳になれば一夜夢中におそはるゝ事あり是金勢神の淫瀆なすが故なりといふ。中古一靈人この犯暴を惡みて鐵の鎖を以て繋ぎたりといへども、猶その淫瀆を止めず、時々

#### 遊行をなす」

とこの卷堀神社の金勢神などは明かに破瓜用、自慰用に使用された匂ひがする。

次にもつと著しい例は、

の鎮懐石である。

は三韓征伐のみぎり、妊娠中で

あつたので、石を腰に挟んで出征された。その石が九州筑前國怡土郡深江村の陰陽神(性的神の三千年「一〇二頁参照)及び、信濃の若槻村の蚊里田八幡の(性的神の三千年「二七頁参照)神體となつたと云ふ傳説である。此の鎮懐石が果して何んの用に立つたか、

斯うした三四の例を見ても古代の日本に於て一種の陽形を自慰用に使用した事は推定し得るであらう。

それから例の「古事談」や、「水鏡」等の道鏡に關する話や、「古語拾遺」に出て居る虫害を防ぐ話等は有名だから略す。

斯うして見ると古代の日本には生殖器神としての張形と自慰用のそれとが、ごちゃ／＼になつて行はれて居た事は想像がつく。然し精巧な工藝品としての張形が昔から日本にあ



つたとは信じられない。矢張り支那朝鮮邊からの渡來說が本當らしい。

支那から來たとすると、其の時代は當然奈良朝時代、遣唐使や留學生が盛んに交通した頃、要領のいゝ坊主なんかど、お經文と一緒にトランクの底へ忍ばせて來て、ヘイ珍品一個とか何んとか云つて、朝廷の貴婦人達に捧呈したのじやないか？ だとすると當時の精巧な張形使用はごく上流に止まつて中流以下に普及するまでには至らなかつたらう。

それから平安朝、源平、鎌倉、足利と年代が降るにつれて、張形も追々大衆的となり、足利末期の明應年中に長崎へ長命丸が渡來した(蜀山人「通詩選諺解」)とあるから、當然同時に張形も渡來したものだらう。だから乏しい資料によつて推定する事を許されるならば、張形が商品として公然賣買される様になつたのは、足利末期からだと見るが至當である。で、其の時秘藥秘具の取引を行つた男は、間違なく後世の四ツ目屋の祖先であると云ふ名譽を得可きである。

長崎から京阪へ移つて四ツ目屋稼業は目ざましく發展した。だが足利の末期から戰亂が

打ち續いた爲、實際に彼等の商賣が安定したのは徳川が天下を一統してからであると思ふ徳川期になつたと云つても家康、秀忠、家光の頃まではやはり曖昧で、四代將軍時代に初めて其の繁昌振りを明示して居る様である。所で其の時分の京阪に於ける秘具、秘藥屋が四ツ目屋と云ふ屋號を冠したかと云ふ點は疑問であつて、私の知る限りでは、まだ其の屋號は用ゐてなかつた様だ。これは西鶴以下八文字屋等の浮世草紙などにも、はつきり四ツ目屋と云ふ文字が用ゐてないのでも解る。

一寸前へ廻るが、鳥羽僧正作といはれて居る「稚兒の草紙」鎌倉時代の物とは疑問で、室町時代？ 此の有名な本の中にはつきり張形の記述がある。

「……此童ほいなきことにおもひければ、夜々したゝめて、まづ中太と云ふめの子の男をよびてははせさせて(二字)せられつゝのちには、おほきらかなるはり、かたと云ふ物をもちてつかせて……」

この文章には立派に張形を使つて居る畫が添へてある。



扱て京阪に於ける四ツ目屋が如何なる屋號を用ゐたか？と云ふ點だが、これは必しも唯一の名前と云ふものはなかつたらしい。「好色旅枕」、「見た京物語」、「好色日本鹿子」、「好色一代男」、「好色小柴垣」等に張形に関する記述があるが、別に何々屋で買ったとか作つたとかは書いてない。大抵は小間物屋とか、細工師とかと漫然書いてある。

其處で、此の商買が江戸へ下つて(寛永年間だと蜀山人は云つて居るが、宗鑑の「大筑波集」に「あづま路のたが娘とか契るらん逢阪山をこゆるはりかた」とあるから、張形が江戸入したのは足利末期であるらしい)堂々と兩國に店を張る様になつてから、四ツ目屋と云ふ屋號を使用したと思はれる。

それから徳川の爛熟時代から末期へかけて隆盛を極め、明治期に至つて又屋號を變替し現在ではどこにどうして居るのか解らなくなつて仕舞つた。

最もそれより前、京阪地方で四ツ目屋の屋號を冠して此の商買を行つて居た事は文献にある。「大阪繁昌記」に新町瓢箪橋に四ツ目屋があつた事が記されてあるが、これは勿論四

ツ目屋が江戸に出来てからの事である。

猶大阪新町の四ツ目屋が何度も檢擧された事は外骨氏等の著書によつて知られて居る。四ツ目屋の最後は廢業する時、全部を今の大木五藏圓の先代に譲つたとの事だが、今では大木家にも四ツ目屋の遺物は何もないさうだ。

大變荒らつほい叙述で申譯ないが、四ツ目屋の歴史と云ふものは、甚だ朦朧不明で誰に聞いてもよく解らぬ所へ、多少調べた文献の原稿は全部災難にあつて仕舞つたので、如何とも致し方なしと讀者諸君も我慢して下さい。

以上の概説によつても知られる如く、日本張形の黄金時代、即ち語るに足る可き時代は徳川期、而も西鶴、八文字屋、師宣、祐信以後、歌麿、北齋、政演あたりから、國貞、英泉、時代の最盛期、更に降つて芳幾、芳年、國周以下の末期赤本作者の廢頽時代にかけてである。明治になつてからは、本當の鼈甲製の張形と云ふ雅味が漸次薄らいで、取立て、述べる張合ひも無くなつた。



先づ最も精巧な工藝的張形が出来たのは、それ専門の張形師が、客の注文に應じて丁寧親切に、こつ／＼製作して居た元祿時代附近のものであつたと思ふ。西鶴あたりの中に出て来る一物は、桐の箱に入れて、上野の博物館へでも陳列していい逸品に違ひない。

それから張形の需用が高まるにつれて、小間物屋がこれの有利なるに着眼し、張形師と顧客との中間に這入つて、兩者の便を計ると共に己れ達も、其の上前で巨利を博した。更に此の小間物屋の片手間仕事で、四ツ目屋になつて、堂々たる商賣化し、様々な新製品をも發明して、飽く事を知らぬ時人の嗜好を満足せしめた。

大量生産となれば必ず品は落ちる。従つて張形の最大需用期と思はれる文化文政の爛熟時代に出來たものが元祿あたりの製品から見劣りのするのは當り前の事だらう。それでも明治大正期に密賣されて居た粗製品から比較したら、頗る立派な物である事は當然だ。現在の張形なんかはゴム製を除いては、とても危険で使用出來さうもない。

扱てこれから愈々張形の實用指要と云つた肝腎の處になるのだが、單に文章のみでは吞

み込み難い。どうしても畫を添へて説明する必要がある。然し畫を添へる事は亦公刊書として絶対に不可能だ。隔靴の恨はあるでしやうが、あきらめて、眼光紙背に徹する式の活眼で會得して戴き度い。

秘具を分類して、

(A) 張形の系統

(B) 張形以外の物

此の二ツに大別される。

(A) 張形系統

(1) セムリ。指人形。抗り。つめ形。

(2) 張形。御姿。男形。御用の物。御養の物。箱入息子。京形(水牛製の張形)



- (3) 大松原流張形。此の流の張形は一種の變形であつて、五種類ある。
- (4) 互形。共喰ひ。兩首。
- (5) 甲形。
- (6) 鎧形。
- (7) 姫泣き輪。
- (8) 朧形。
- (9) リんの輪。
- (10) なまこの輪。
- (11) 助け舟。たぶりとん。(蘭名)
- (12) ヘエコノイヌホ。

(B) 張形以外の物

- (1) リんの玉
- (2) 肥後ずいき。
- (3) せきれい臺。
- (4) 撞花杖。
- (5) 吾妻形。茶筌(布にて作る)。革形(革製の吾妻形)。
- (6) 胴人形。
- (7) 陶器妾。
- (8) 悋氣の輪。

(A) 類



(1) これは小形の張形で指へ嵌めて使用する。材料は張形と同じく、鼈甲、水牛、革、金属等を用ゐる。

(2) 張形の最上品は鼈甲細工である。精巧な物程薄手に出来て居る。それで取り扱ひに慎重な注意を要する。先づ一般の使用法は、數時間熱湯の中へ漬けて置き、後其のまゝ使用するのと、熱湯にひたした布片を胴内へ入れ根元は栓をして使用すると二通りある。使用前に數時間熱湯へ漬ける事は是非とも心得置かねばならぬ秘傳である。一本の張形の使用法は次の如く澤山ある。

(イ) わきずかひ。

わきづかひにそろ／＼と、あしらひたまふ惣じてわきづかひといふは  
まだ形をつかひならはれぬ初心の中の事ぞかし。……(西川祐信畫八文  
字屋本「色時雨」)

(ロ) 片手づかひ。

(ハ) きびすがけ。

此の使用法には張形の根元について居る紐が必要になる。此の紐で足の踵へ結びつけ、片手を持ち添へて行ふ。

(ニ) 足づかひ。

この方法は前と同様に形を踵に結びつけ、更に別の紐で足を繋り、頸へ其の紐の一端をかける。これはやゝ進歩したやり方である。

(ホ)

氣分が出ぬ。これは本當だらう。「……いまだ廿五六と見へて色しろくすきとをるやうな若後家の、小ごゑにて申されけるはさればわしも、そのみしあんいたしまして此中せんたく比ひらの夜着のすそに、  
下したにふとんをかさねおきて、

(ヘ) 弓じかけ。

これは無類の名案。物理應用の妙である。主として武家の婦女子が行ふとある。